女學雜誌

明治三十一年十二月廿五日

第四百七十八號

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百七十八號目次

◎社説
南洲先生祭祭式
誰か詔勅の責を任ふぞ
地租増徴の話
クリスマスの歌
◎女學
家的病理　某醫學生某
女學校に關する希望　山形東根
◎評論
哲理小説音樂論　高柳有美
◎雜録
海岸寄宿舎談
月前消悶
青葉の夜景　有美
木戸松菊の逸事
◎隨感
年の暮
◎時文
字音假名遣改正の話
樗牛の新作「文會」
第四世伊藤長次郎翁、[illegible]
經濟瑣言
新刊雜誌拔萃
◎片々　◎時報

社告

本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す
十日發行の分は稍や平易なる記事を專にし、第一、家庭の整齊改善に係る事項を主として、其他、文藝、史傳、…等の事に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する香識の卓見を網羅し、大に世上君子に問はんとするを旨とす
單に十日發行の分、又は二十五日發行の分のみを指定して所望せらるゝあらば其の請めに應ずべし

◎女學雜誌定價表◎

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓拾錢
	一年分定價	貳圓
	（内國無郵税）	
	代金は總て前金にて御注文ありたし。年末引續き御講讀の諸君は前金切れ候共御斷無之間は引續き發送することも可有之事	
廣告料	一行（五號活字詰）一回	前金拾錢
	同　三回以上	一割引
	同　六回以上	二割引
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし、郵便切手にて送らるゝ人は總て一割增に計算せられたし	

明治三十一年十二月二十四日印刷
明治三十一年十二月二十五日發行
發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（東京本局十九號）

社告

女學雜誌代金の事につき

女學雜誌は多年の讀者を有し皆な稀有の知己なれば雜誌代金滯の節も曾て御催促不申上前金切候とも引續き發送致居候場合も多くかねて廣告いたし置候ごとくに候乍然年末は可成く勘定清算致度候に付滯りの諸君は東京駒込郵便局あて小爲替にて代金送附ありたく候、尙不便の節は郵便切手（五厘又は一錢印紙）にて送られ候とも差支無之其節は一割增にて計算被下度存候。右謹告す。

十二月

女學雜誌社會計

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第四百七拾八號
明治三十一年十二月廿五日發兌

社説

南洲先生銅像除幕式

西郷先生の銅像成り、除幕式執行せられ、偉大なる老南洲、悠然として當年劍戟の巷に立ち、今や莞爾として府下百万の人煙を望む。肖像彷髴の情あるべし、正に時態を眺めて抑そも何樣の感懷ありや。

想ひ起す、維新創業の抱負なるものは眞に洪遠なるものにてありき。西郷先生、其の公大正明の氣字を以て、沛然たる諸勢力を呑吐し、一身、新潮流の中央となりて、死活進退の樞機を握る。彼の時にあらざれば此人を産せず、此人に非ざれば彼時に應ぜず。天幸ひに斯の土に祝福して、此の偉大なる人靈を賜へり。假令、其の手腕の未至らざる所あり、其の利導の未だ完からざる所ありしとするも、先生の魂は長く存し、其の靈は久しく活く。感應顯著、徹底深玄にして、遂に我同胞を薫化して休めず。初め、姦物とせられて後ち忠臣となり、初め賊名を負ふて、今ま大義の名を得たり。惟ふに、明治三十年の政史は蓋し或いは空焉に歸せんとも、西郷先生當年の偉大なる抱負、公明なる識見は長久えに存せん。

悲しい哉、原動の力夙に逝いて、惰性既に盡き、機先幾たびか制せられて、機後屢ば敗れ、人心倦み、世情萎え、將に其の如何んとならんとするを知らず。爰に一と度び西郷來を夢みて得ず、今は其の肖像を立てゝ之を仰ぐ。人心、先生を忘るゝ能はざるものは、其の靈の清ければなり。人心、先生を求めて休めざるものは、其の人格を欠けば也。嗚呼、如今其の像を撫して長歎するもの天下幾人ぞ。

顧みて念え、今時の政争抑そも何事ぞ。議會幾度か解散せられて、年空しく過ぎ、功臣白髮多く、勳位漸やく下る。四面の楚歌次第に近づき、對岸の火勢日々强し。眇たる海中の粟、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

僅かに軒輊として、世界の風波を知らず。嗚呼、神洲の天何れの日にか定まる。

夫れ、東台の花、開き又落ち、不忍の月、盈ち又欠くるの下、屹然として岳あり、岳上、大像立つ、此の像、栄枯衰盛を閲観して、達然として得る所あり。天下幾多の青年子、當に之に歸依して、其の悟覺を了すべき也。

國は小なるを憂ひず、人の小なるを憂ふ。人偉大なれば、國亦た偉大たらざるを得ざる也。國家の難局を厭わず、人の難局に際励せざるを厭ふ。嗚呼、少年子、何んぞ彼の巨眼黒眉の偉人につきて學ぶことをせざる。

○

誰か詔勅の言を貶ふぞ

近時政論の輕調

◎地租增徴の可否、當今の大問題となり、双方それ〴〵の論據によつて是非を主張しつゝあることなるが、先づ一応、厳そかなる注意を呈せねば成らぬことがある。

◎凡そ、功を主人に歸し、咎を我身に負ふが、人の家來たるものゝ覺悟であらふ。古しえ下司下郎と云ひ、今日、下男下女奉公人と云ふさもしき境涯の族にても、心得あるほどの者は、是非とも此の覺悟を備えて居るのである。然るに、一天万乘の君にして、千古獨一の元主となられたる吾皇帝陛下に對しては、臣たるものゝ忠肝義膽、所詮此輩等と同様であつては濟まぬことで、固より非常の覺悟、非常の決心より出でねばならぬことである。今ま茲に地租增徴に對して詔勅を奏請せんとするものは、申さば、陛下前年の綸旨を無にして、其の有がたき聖約を反古にし、蒼生万民に對して、御旨を變えさせ玉ふ御食言譯の勅語を奏請するのである。下々の間柄に喩えて、卑近なる形容詞をもて言はば、吾主人をして目下のものにアヤマラスのである。主人が前年の約束は必竟先見の足らなかつたので、今日は迚も致し方がない、全く主人の不明であつた、今日の場に臨むで勘辨してくれろと云ふような言譯をさせるのである。たとへ万一止むを得ずして此に至らするならば、此の主人の番頭となつて、主人の傍らに坐し、主人が此の言譯を爲るゝを聞いて居る身になつては、血の汗を絞り、腸の肉を刻るほどに苦しく思ふべき筈で、切めては、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾が給金も差出し、吾貯蓄も差出し、吾先づ其不足を補ふに對して誠心の合力を呈し、十分に其の情を悉してこそ、現在の場合、他に致し方なきとも人心に貫徹し、主人をして目下に向つてアヤマラスほどの失態を爲乍ら、其の番頭の苦心を察し、聞くもの悦んで相應の奉公を爲すとであらふ。之が人情至誠の感應と云ふものである。

◎然るに、今ま地租増徴せられんとする難境に際して、多年陛下の番頭となり居る人々の言動は如何である乎。先づ第一に、前年、陛下が彼の詔勅を出し給ふに際して尤とも近き輔弼の關係を有せしものは、何人である乎。今日の地租増徴論者中にあつては、伊藤侯と、松方伯であると記臆して居る。伊藤侯は今ま何を爲て居らるゝ乎。先日、帝國ホテルの演説に何か大相豪傑らしき事を遠慮もなく公言せられた丈けで、此の大切の時節にワザ／＼西に逃れ、閑雲野鶴を友とするなど吹聽せらるゝのみか、到る處ろ艶聞醜聞を漏さるゝと云ふは何等のお覺悟である乎。抑そも今日斯の如く財政困難となりたる第一の元因は、日清戰争である。之に大關係を有するは矢張り伊藤侯である。此の侯、曩には陛下が地租減率の

預約を爲し給ふに御賛成申し上げ、今日此の御預約の取消されんとして、陛下が綸言を變へ給ふ苦しき御場合を知り乍ら、傲くも大言を吐きつゝ婦女子に戲むれ、而も所々に御信任の厚きとを吹聽するとは、何たる事か。殆んど其の意の在る所を知るに苦しむ。曩に侯は、勳爵を奉還せんとを請はれしとあり、其時吾輩は一種の疑を存して此紙上に少こしく問ひ置たるが、今日好機會に付、更に之を問ふべし。抑そも侯の其勳爵を奉還せんとせられし時や、大勳位侯爵に屬するものとして陛下より恩賜せられし金幣をも併せて奉還せられべき覺悟でありし乎。此金は、昔しで申さば家祿の如きものにて、侯爵家に附屬すべきものであらふ。左らば、單に勳爵を辭し申して其の家祿丈けは殘すと云ふ筈は無いとで、明治の初年、徳川慶喜が大將軍の官職を奉還せんとした時、併せて其知行を奉還せぬとがある乎と叱責した長州士ひの一人としては、伊藤侯たるもの固より其の事理を承知して居られる筈であらふ。然るに、吾輩が當時此の疑問を發して多少世人に聞いて見るに、世人は皆な意外の事に思ひ做し、金迄でお返し申す積りは無つたらふと言ふものが多い。伊藤侯たるものに

左様な誤りはない筈であるが、之によつて世人並々の批評の調子が分ると云ふものである。

◎今や、財政の困難殆んど其の極に近づき、決して増徴すまじき筈と豫定せられたる地租すら増徴せんとするに至りては、之に大關係ある伊藤侯たるものは、切めては其の慚汗禁じがたき至誠を披瀝して、天下の欝憤を減ずべき筈である。五万六万の金は些細な事だなどと云ふは太はだ宜しくない。金の高によるものでない、人の誠心によるものである。伊藤侯たるもの先づ率先して其の家財を義捐するが宜しい。次に、松方伯の如き、國家の財政大に困難せる時に當つて、家に數百万の富を積み、元來、勸農局、農務局の出身で、深く農耕の情を知り、農業の人に知己あり乍ら、吾が家の富を一錢も減ずるヿを恐れつゝ、至誠々々と言はるるとも、人は決して悦服すべき筈はないのである。

◎國家の入用は、國民が出すべきで、素と出さねば成らぬものを出すに何の不思議はない。然し乍ら、之を出させるには夫々の道もあり、其事に尤とも責あるものは、又先づ尤とも責を盡さねば成らぬ。然るに伊藤侯は殊に太甚しき人で、次に松方伯、其他の元勳と自稱せらるゝ人々に至る迄で、今日の如き無責任の行狀にあり乍ら、ひとり難を陛下御一人に及ぼすの結果を來し、たゞ／＼政黨者をのみ責めんとするに至ては、思はざるも亦太甚しきヿと言はねば成らぬ。

◎今の薩長の人々は、素と勤王々々と言ふ看版で、天下に名を賣られたのであるが、勤王の實の何處にある乎は殆んど解しがたきヿである。陛下の詔勅に對しては、如何なる覺悟を抱かるゝ乎、其平生の感情に頗ぶる疑はしい心地がする。動やともすれば、詔勅を仰ぎ、其事過れば殆んど忘却しては居られぬ乎。實に怪しからぬヿである。中には、其の發せられた時に自分の關係薄かりしヿを述べて責を逃れんとする人もあらふが、夫も同一に間違つて居る。たとひ、自分の關係なきヿとしても、詔勅は詔勅で、陛下の御言葉である。昔は綸言汗の如しと言つて、一と度び出ては引込ますヿの出來ぬものに喩へてある。如何なる事情にせよ、既に公けになつたる詔勅であれば、出來べき丈け、其の御主意を貫徹せしむるように盡力すべきである。太はだ不敬の様ではあるが、もし其の詔勅が當世に適當至極の事で無いとしても、よしんば

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

何程の不便があるとしても、出來べき丈は其の終を結び、一徹一貫の道を了するヿに苦心し、其上は自分の過に歸して、徐ろに善巧の結果を付けるのが臣子の本分で、凡そ人知れぬ所に冲々として苦心する臣子の苦衷とは、大抵此邊に存するヿである。然るに、あの時は自分の知らなかつた時だとか、自分の關係せなかつたヿだと言つて責を逃れんとするは、自らの責を逃るゝに急にして、陛下の御責と爲し玉ふ所らに氣付かぬと云ふもので、甚はだ輕薄なる覺悟である。况してや、身自から關係して、之に尤とも責任ある人にして、毫も其邊の覺悟なきヿは驚ろき入つたるヿで、斯る人を尙ほ帝國の政治家だと許し置くは、日本臣民の耻辱とせねば成らぬ。

◎凡そ、善にせよ、不善にせよ、將來、成るべく、詔勅を奏請せぬよふに致したい。既に朝鮮の獨立に對しても、嚴然たる詔勅が出て居る。東洋の平和に對しても亦嚴然たるものが出て居る。而して、其の詔勅が單に嚴然たる丈けで、日本の政治が實際其の首尾を完ふして居るヿは一つもない。詔勅の出た時は一時として、其后全たく忘却して仕舞ふのが、大抵の政治家今日の常であるが、人民も亦た之を忘れて仕舞ふと云ふは何事である乎。忠不忠は申す迄もなく、實に不見識と言はふか、軟弱と云はふか、輕薄と云はふ乎、遺憾慚愧千万の事である。

◎もし單に收税の道理から言はば、今日最上の租税は地租であらふ。一種の論者が言ふ如く、增徵しても小作には響かぬなどとは無論思はぬ。日本の小作制度は西洋の經濟家の言ふ如きレントの理論の簡短にあてはまるものでは決して無い。然し乍ら、又一種の論者の言ふ如く、之で小作が大に苦しみ、五反農夫が大に難儀をするなどとは思はぬのである。他の事情を別にして吾輩の意見を言はば、吾輩は矢張り地租を增すヿに贊成するものであるが、前年の詔勅を記臆するの故に、之は最后の收税だと心得て居る。出來べき丈け法方を案じ、出來べき丈け、詔勅の成り立つよふにせねばならぬ。今の閣臣の如く、無雜作に、無責任に增徵を主張すべきものでないと記臆して居る。實に苦心冲々として、泣いて此の最后の途に據り、自から其の不明を謝して、陛下に綸旨を改ため玉はんヿを祈望すべきであると思ふて居る。之も、伊藤侯などが屢〻爲らるゝ如き輕薄なる處置では同じく不都合である。爲

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にすると云ふ考が少しでも混つては既に利用策である。左様な權謀の私心は一切掃除し、眞に赤誠より出づる言行一致の忠節あるにあらざれば、今日の難關を貫ぬくとは出來ぬ筈で、出來ぬのが寧ろ當然である。

クリスマスの歌

湯谷紫苑

一、くすしや君の　うぶ聲
み空も地も　ふるひ
サタナの城は　くづれ
罪の根こそ　たゝれけり。

（合唱）曠野に水　わきいて
沙漠に川　ながれて
惠みの光　てれば
四方の民草　さかえ
平和さやの　またく
あたらしき代と　なりぬ。

二、くすしや君の　みちから
たかぶる者を　おとし
ひくかるものを　たかめ
世はあらたに　なりにけり。

三、くすしや君の　[illegible]
（アレキサンドルは　いかに
はたナポレオン）は　いかに
主の稜威は　代々たえず。

女學

家族病理（一）

社會醫學生　某

疾病とは何ぞや、曰く自然の整理發育を損害せられたるもの即ち是れなり。其輕症は直ちに癒すべく、其重症に至りては之を治療するに幾多の年月を要し、癒すべからざるものに至りては藥石効なくして死滅す。老少不定、常なきは人の身の上なりけり。

人身に病ある如く、家族、社會、國家各病症を有す。醫學上の眼孔を以て家族より社會國家を見來れば、其病死自ら定まりありて、之を治療する道亦存せずんはあらず。個人の病氣によりて惱むが如く、家族、社會亦共に惱む。觀じ來れば一種の定命あり

今論ぜんとするは、家族の疾病にして、其影響する所は頗る大なるもの、而かも其病理學は未だ人身病理の如く明確なら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ず、又其病名も一定せるに非ず。蓋し家族病理學の如きは今後一層の注意を惹き益々明瞭となるべし。斯に其二三を擧げんか、

◎一に云く、子孫蕃殖病——之を二種に分つ(一)過少蕃殖病、(二)過多蕃殖病是れなり。子孫を蕃殖するは自然の妙理にして社會を繼續するの根原なり。而かも其蕃殖過少たり又は過多たるもの同に疾病と認めざるべからず。此病氣の來る所は學理上未た明晰ならず、從つて之を治療すると難し、婦人病學者は五六の說明を與ふるも多くは未定の問題たり。

◉第一の蕃殖過多病に罹れる家族は、貧家にありては子女の敎育を充足するに由なく、無敎育の儘にして他家に奉公せしめ幼少より憂き苦勞を受くるの悲境に陷れ、遂に良民たるの資格を欠かしめ、不良の徒と化せしむ。或は藝娼妓とし或は車夫馬丁として生活するの止むを得ざるに至らしむ。富家にありては父母の感化直接に受くるの期なく、乳母、仲働等の手に養育せられ、長じて敎育を學校に受くるも、直接に父母の敎育感化を欠くが故に、徒らに高慢の氣、奢侈の風に長じて善良の氣性を消滅す。過多の蕃殖は、貧富共に家族の病なる故に貧者は往々墮胎する如き弊害古來より行はれたる地方少からず、否な東西古今に通じて顯著なる事實なり。婦人病學上、五六の蕃殖限定說を見るも何れも未定の問題に屬す。聞く對島國の人口殆んど一定して增殖せざるは墮胎の盛んなるに由ると。又聞く西洋の下等社會に子女の少なきは、醫師之を內密に墮胎せしむるが爲めなりと。然るに今や墮胎は刑法上、大罪の一に屬して殺人の罪に問はるゝは、我邦の規定なれば、貧民窟、裏長屋等には、汚衣を着せる子女甚だ多く而して此輩が紙屑拾となり、カッパライとなり、放火兒となり、魚の腸拾となりて、種々の惡事を爲すの根本となりつゝあり。試みに貧民社會に入らば、其子女の多きに驚くべし。

此治療法は、民法に規定せる男は滿十七、女は滿十五年に達して婚姻し得るとの年齡制限は其効なし。此病氣によりて社會大に惱み、掏摸、窃盜、放火等を始め無敎育の少年多きは畢竟其根本たる家族の蕃殖過多病に依るを知り、道德上より早婚を止むるに至りて治するに至らん。生理、經濟、社會、人生幸福上より早婚の害を知らしむるは一法なるべし。

◉第二の過少病に罹るもの又一弊たり。其過少なるは社會より

見れば衰弱を意味し、國家の基礎たる人口の減少なれば少しも變すべき現象に非ず。佛國の如き現今大に之を患ひ、又或國に於ては盛んに賞與を施して蕃殖を獎勵しつゝあり。此病氣も婦人病學上、二三の説あり。獨り獨逸の一醫學者の如き人工の法を發見したりと云ひ、或は坊間に其賣藥を爲すありと雖も、之れ又明確的中のものと信ずべからず、而かも我今日の現狀に照して其治療法の發見を要せざるなり。蓋し貧民の如きは過多病に患ふるものなればなり。但し社會的より見ずして家族に於て之を見るに、其過少なるは子女に對する愛情過多にして却て不良の我儘者たらしめ、放蕩無頼の游野郎に變ぜしむる害あり。可愛き子に旅行さするの實を得ずして、恰も獨活の大木の如く世間知らずの坊樣たらしむ。之れ子女の少なき家族に於て見る所にして、非社會の人物を世に寄進するもの、一種の疾病と云はずして何とか云ふべき。　は及ばざるなり。二は過ぎたるものなり。

次は、住宅に關する病氣――住宅に關する疾病は二種に分たる、(一)居住場所の適否と家屋の構造(二)轉宅の頻繁なり。

八

第一の居住不良病は、經濟上の關係最も大なり、地方によりては飲料水の不潔なる土地なるも尚ほ從來住み慣れたるより移轉せざる所ありと雖も、大概住居する場所の變更し難きは惰性と財政とより來るものなり。惰性は之を排すべし、財政に至りては人生不如意たるを免れず。家屋の構造は大に改良すべきものあり。今一々之を詳述すると能はずと雖も、こは讀者の改良案と不便を覺知するとより來らざるべからず。蓋し居住の場所は衞生上に害なく、惡事の感化を受くる恐れなく、土地の乾燥して不潔ならず、交通便にして能く寒暑を凌ぐに足らば之を以て滿足せざるべからず。居間の裝飾も大に改良する要あり。居住所と家屋の不良病より來る弊害は擧げて數ふべからず。人身を害し、子女の教育、日常の應對、天災、失火其他一として良好の結果なし。假令成人となるも不潔の場所と不良の家族とは、道德上、審美上の發達を妨くると多し、或は特更らに社會改革家が不潔の場所に居住して、四邊を改良する時にありては、却て四隣を感化する働ありと雖も、之れ強剛の意志を有し、自ら高くして低きを改めんとするものなれば　通常に應用し去ると能はず。普通に於ては成るべく

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

良好の居住を撰び、家屋の構造を便利に爲さゞるべからず。

此治療法は金錢を濫費せず、漸次良好の地に進むにあり。見よ、芝新網、下谷萬年町の貧民窟の如き場所にあり、家屋に住して爭かで良好の心念を發すべき。彼等の改良は先づ場所を變化し居宅を變ぜざるべからず。同時に職業を與へ敎育する素より可なり。

◎◎第二の轉宅頻繁病は、事態頗る大たるもの、此病は都會の不生產業者に多し。官吏、小商人、敎師、等は其重もなるものなれども決して之に限らず。轉宅頻繁病とは家移りの事にして、今や東京の如き各區毎に、貸家一目、ハウス商會、貸家紹介社等の設立を見るに至り、各人力車宿には「引越荷車仕候」の掲札あるを以て、如何に東京には貸家住居の多大なるかを知るに足らん。蓋し市中七分通りは借家住居と見て不可なかるべし。此病に罹る家族は斯の如く大なるも半ば永住するものなれば其害割合に少なしと雖も、又その半は屢々轉宅を爲すものなり。

此轉宅病の流行は、明治維新後に於て見る所、蓋し政界の變動と共に封建割據の風破れ、東西南北各地方より東京に來るもの多く、江戸ッ子は今や諸方に散在して田舍者好地位を占めたり。鐵道の便、四方を開通してより益々變動し來り、舊來の面目を一新せり。都は掃溜の場所の如く、三河武士、北條臣族の企圖は單に町名に名殘を止むるが如し。過渡の時機亦如何とも爲し難しと雖も、此病氣も五六十年を經ば稍平治せらるべし。今日は十年の間に三十回位の轉宅せるもの少なからずとす。此病氣の家族と社會とに及ぼす影響や、頗る大なり。其一二を云へば、

子女の敎育――幼兒一二歲は父母の膝下にあり幾度轉宅するも彼れの世界は父母と室內に限らる。三四歲より外遊して友を求め始む。友と遊ぶの時機に達して轉宅せんか、彼は始めの友を慕ひ家を慕ふて止まず、其可憐なる心情察する每に流涕せずんばあらず。後ち更らに轉宅すれば又前所を慕ふ。斯くて屢々轉宅すれば、其中最も永住せし所を以て己が居宅と信じ、他は假宅に過ぎざるものと觀念す。而かも又更らに永住すれば之を自宅となすに至る。斯かる變遷の間に小學に遊ぶの時機となれば轉宅甚だ難きを覺ゆ。若し更らに轉宅すれば其間自然に、自己の「家屋」「自己の住所」「自己の山川草

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

木」なる観念を變轉せしむるにて、大概は之を皆無とするの危険あり。此に於て竹馬の友なく、懐かしき山川草木なく、土地の観念なし、眞個に可憐の極みなりと云ふべし。我が家は何處と問はるも父母答ふるに言なきに至る。

犯罪不德の增加――德川時代特に元祿以後の江戸社會、今日の村落に於ては近隣の關係甚だ密とす。自身番と云ひ、氏神祭禮と云ひ、町内の契約馳走と云ひ、向ふ三軒兩隣りの關係の如き特に與かりしが故に、自然の間に制裁力行はれ、多少進歩を害するも道德上には良好の結果ありたり。然るに今日の都會特に東京の如き、自他の轉宅頻繁なれば、近隣の交誼は或る一部に行はるゝの外殆んど見るべからず。從て不德犯罪の行爲をも大ならしむるに至れり、即ち責任は個人に歸して家族に及ばず、連帶責任は實行者に限りて、傍杖を加へらるゝ事なきに至りたれば、隣家に殺人罪犯者あるも、妨害住居するも不關焉也。

經濟的疑心の甚強――都人士は輕薄なり猜疑心に強しと云ふと雖も、都會に於ける一般の人情、習慣は其根本は轉宅より來れり。一年交際を厚くして心切なるも轉宅し去れば、距るものゝ日に疎く、心を盡して交遊せるものも杳として後ち音信なく、社交心の發達せんとするも得ざるものなり。彼等が之に慣熟したるの結果、容易に心を許して交らず、一片の白銅も幾度か之を驗して受取るに至れり。

其他、土地愛着の念、懐郷の念、交友の情等の眞義を解せざるに至らしむるは、多くは轉宅頻繁病より來れるものとす。

此治療法は、社會の進歩と共に自然に淘汰せらるゝにより平治せらるゝの外、良策なし。由來得べくんば、家族構成を晩くならしめ、一定の居住に永棲するの位地に達して後ちに期せんと可なりと雖も、こは空想にして且つ現時の流行を止むるの効なし。獨り望むべきは自治制を強行し、町内に一種の組合を立て互に便宜を計るに至らんとなり。

――[illegible]――

ただ天地は風雅なり、万象も亦風雅なり、此風雅に作興の所謂なり、造化に随ひ四時を友とす、見る所、花にあらずと云ふとなく、見る所、月にあらずと云ふとなし、心、月にあらざれば鳥獣にひとしく、形、花にあらざれば夷狄に等しく、夷狄を出で、鳥獣をはなれて、造化に[illegible]

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學校に關する希望 一二

山形東根

○女子高等科及女子大學の程度

如今高等女學校は各地方に設立せられたれども、其程度は男子の中學校に均しきものなれば、更らに高等の需要に應ずる所なかるべからず。是れ女子大學設立の擧ある所以。我輩大に之を賛して措かず。然れども女子大學又は高等女學校卒業者の入學せんとする學校の程度は、今日男子の入學する高等學校に大學の課程を混入したるものに非ずんば、不適當たるを免かれざるが如し。蓋し女子は普通の學業を卒へたる後ちは直ちに婚嫁せんとする情念強く、婚嫁の後は殆んど應用時代と云ふべきもの也。男子の高等學校程度を充足に蹈み更らに大學程度を卒へんとは、今日の時勢に於て殆んど不可能の事に屬するものあり。されば今日中學校程度の中等教育を卒へたるもの丶爲めに設くる高等科、並びに女子大學校には、少くも左の學科を設けざるべからず。

國文學(每學期設置)　論理學　心理學　生物學
漢文學(仝　)　教育學　世界文明史　日本政治地理
英文學(仝　)　經濟學　文學汎論　政治學
法律學　社會學　審美學　社會問題(特に婦人社會問題)
倫理學　哲學史　日本文學史　支那文學史

若し高等科にして二年を以て終るものとせば、大凡三學科を一學期に教授し了す每週一科三時間とせば三科なれば每日一時乃至二時間となるべし、若し三年とせば學科を減じて充分に教授し得べし。和漢英の文學は每期之を授け各科合して一日四時間平均とすべし。

惟ふに政、法、工、農、等の專門は今日の婦人に適せず。恐らくは一般婦人の要求外にあらん、故に其天性境遇よりするも、高等科と云ひ、女子大學と稱する所は、先づ文學科に限らざるべからず、醫學の如きも今日專門となすの要なきが如し。手藝の職業科は必要なれども中等教育を受くるものは同時に職業科を學ぶ能はず。故に職業科は中等學校と對立して普通教育を受けたるもの丶入る所となるは自然の傾向なり。されば高等科として必要に且つ出來得べきは文學科とす。而かも文學の教育は、和漢英の文章を書き又は讀むの力をのみ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

養ふべきものに非ず。素より是等の能力を要するは明かなれども、之のみに偏すべきに非ず。故に右に列擧したる如き學科を主として授けざるべからず、又文學科と稱する社會上の知識を平分する要あり。今日の婦人が時に文を草し歌を詠み若しくは英文を綴るものありと雖も、社會上に關する知識は殆んど缺乏して、一國の組織、運動、現況は勿論民法の何たるやも解せず、又同性たる婦人社會の如何なる狀態なるや、等の極めて簡單なる事をも辨ぜざるが故に、新聞を閲讀するも興味を感ぜず、從て社會の出來事に同情を寄すると能はず。慈善事業、矯風事業の如き一般の女子に適當するものあれども、之に關する部面の消息を知らざるが故に、敢て當らんとするもの少なし。之れ余が高等女子教育は、右の如く、文學と社會的學科と平分したるを要すと云ふ所以なり。女子大學校の如きも亦此標準によるべきものと信ず。補助科としては美術の一般手藝に關するものを缺ざるべからず。

○女學校の寄宿舍

女學校の寄宿舍に關する事項は、其校長たり取締たり幹事たる人々の任ずる所にして、多年の經驗に則り何れも改善の方策を施しつゝあるか如し。之れ余輩局外者の容喙すべき限りにあらずと雖も、若し一二の希望を各校に囑するものありとせば、第一は熟舍中に中心燒點となる婦人の存在するとなり。取締、舍監等の役者外に大躰に於て尊敬せられ、理想とする婦人の存するは最先に必要なるか如し。校長は最も敬愛せられ諸子の理想的人物として時に或は神聖視するか如きは甚だ好事たれども、其媒間躰となる所の婦人を更らに要するか如し。心中秘め置く萬端の事情一々之を校長に告白し、校長は一々之を慰撫、靜定するに出陣せられんより、或る媒間躰を通するは人情好む所なるが如し。換言すれば大躰の事情に關する秘事を或人に明し、或人は之を內密に處置する如き役を爲すと同時に、自ら理想に尊敬する人たるを要す。之に當るに最も適任たるは年長の熟長に非ずんば校長の夫人にあり。諸子之に接すれば溫か味を覺え、薫風のそよ吹き來る如く、又寒氷の解くるが如き感を爲さしむる者を要す、取締、舍監等の役にあるものは極めて善良の人と雖も、公然制裁を爲すの職にあれば、善所美所を看取せらるゝより寧ろ欠點の

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

みを看破せらるゝの損あり。故に役員外、自然に尊敬を受くる婦人の存せんとは如何なる女學校の寄宿舍にも必要なるか如く感せらるゝなり。

第二は、各室に茶器一通りを備付け置くとなり。こは生徒各自支辨とし、晝夜二回位茶の湯を立つるは、慰樂の情を起し優さしき心情を開發するか如し。人或は云けん、喫茶すれば茶菓を欲し、茶菓と共に無用の長談を爲すの弊あり。時間に於ても金錢に於ても不經濟たりと。而かも之れ事理に通せざるもの、一定の時間を定め時々休息するは、却て勉强の心を激まし、茫然として斷えず書見し秘密に休息する如きは却て敎育上に弊害あり。金錢上よりするも一日一錢の費として僅かに三十錢に過ぎず。之を三人又は四五人に於て負擔する何ぞ大なる消費と云ふを得べき。塾舍制、家族主義の敎育には第一着として之を要するものと信す。家政の實地に渉るものは學校に於て習得し得べからず。之を習はさるも保證人、親戚等の家庭に入り、或は歸鄕して後ち之を爲す容易なりと雖も、一日一二回の茶の湯を立つる如きは、敎育心理上、極めて良好に非ざる乎、各學校に其制なきは私かに疑ふ所なり。

第三、不自然の制裁及敎訓、こは必すしも女子にのみ關せず、此には一般の學校敎育を指す。彼忠臣の摸範として必ず楠公を說く如きを始め、奇事異例を以て敎育するの不可なるは素より識者の認むる所なれども、心事を敎えずして形骸を敎ゆるより來る所の弊害に至りては、一般に忍ぶべからざるものあり。螢雪を積みて勉學し、寒暑の候特に鍛錬せる人物の例を取りて敎ゆる如きは弊の最も大なるもの、此の如きは自然に發動する傾向を造るを要すと雖も、强ひて修業鍛錬せしむべきとに非ざるなり。普通は鍛錬修業の奇異稀有の心事を開發せしめ文明の度に應じて之を行動するの人物と爲すにあり、自ら感じて鍛錬する所と雖も、之を人に强ゆべきに非ず。今日の學校に往々其形骸より强ゆるが如き傾向を見るは遺憾の事なり。

さもすれば思ふ事なき我身をも忘れて歎つ秋の夕くれ
に手の上に降りし世知らで厭かされて夜半の霰をぞきく
君が代の千歳の影を祈る幾竹の起ふし窓のあけくれ
富士は雪箱根は時雨ゆく雲の果は夕日の武藏野の原

白河樂翁

評論

哲理小景音樂論

（此一篇は、音樂學校卒業生が組織する同聲會の需めに應じて、特に起稿せるものなり）

青柳有美

古き昔、北歐ラプランドの地に住へる民族は、怪げなる太鼓を以て、神靈のいまし給ふものなりとなし、之に歸命頂禮祈願すること、誠に尋常ならざりしぞ。こはたゞラプランドの地のみならず、アメリカの土民など其他總べて古き種族の間には、概ね行はれたるものなり。中世紀の頃にも、亦錦繡莊崇なるものありて、盛に行はれたることあり。夫れ音樂は、文詩建築彫刻繪畫舞蹈演劇などゝ共に、相併べて美術の範圍にあり。されど是等の者と其趣を異にすること頗る大なるが如し。かの彫刻繪畫の如きは、たゞ全宇宙にある眞善美の極小微塵なる一部を捉へ來りて、恰かも之を被ふに百八重の幕を以てし、而して後之を人々の間に示めし天地の實相を推覺せしめんとするに似たり。故に其觀る處や、眞善美の實躰ならずして、之に着けたる衣なり。然れど音樂は乃ち然らず。其傳ふるところは、殆ど宇宙の實相に等く、其の含む處は頗る廣遠にして『無限』に彷彿たり。恰かも之を被ふの幕一枚だにあることなし。されば人音樂によりて始めて大宇宙の實相に見え、眞善美の實躰をまのあたり窺ふべきなり。これ其頗る宗教に近くして、共に『自然』の神の宮殿とも觀るべく、古往今來兩者相待つこと甚だ多き所因なり。故に之を譬ふれば、音樂はなほ集光レンズの如く、『無限』の實相を『有限』の間に殆んど縮むるものとやいはん。されど太陽の肖像の單簡徵銘によりて結ばるゝや、頗る曖昧模稜たる如く、音樂によれる『無限實相』の權化も、亦頗る茫漠たるを免れず。されば

何ものゝおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

とは、これ即ち音樂の所謂にして、空漠は是れその特長たるなり。世或は考慮深からざるものあり、音樂の風の如く捉らべからざるに恨み、何となく物足らぬ心地せらるゝを面白からずとや云はん。されど、こは愚かなるものゝ喋語のみ。凡て細き我觀を離れて、沒理想の界に遊び、宇宙の大なるが如く大なる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ものは皆な常に空漠たるものなり。かの大人英傑の士の往々端睨すべからざるものあるは、是れが爲めなりと知らずや。然り而して、彫刻繪畫の如きに至りては常に形を眼前に示して之に想ひを注がしむるより、人をして其思念を空間のあひだに限らしめ、漂然現實の差別界を離れて、曠大無限なる無差別の實相界に逍遙遊せしむること頗る難し。されど、音樂には空間なく素より形態なるものあることなし。故に、よく現實の現象界を脱離して、『無限』に靈覺するを得るなり。世、音樂に打たれて恍惚陶然恰も濃きラインの葡萄酒に醉へるが如く、全く、我を忘るゝものあるを聞く。されど繪畫彫刻の麗美秀粹なるは、之を見るも歎美たゞこれ勉むるのみにして未だ全く我を忘るゝに至らず。蓋し、空間のほだし嚴かにして、半心よく飛んで幽玄の界に入るも半心はなほ止まりて其形相に執着するを以てなり。されば、ショウベンハウエルが、涅槃に入るの道煩惱を斷つと美術の力によるとの二つなりと云へるは誤にて、後なるは音樂の力によると訂すべきなれ。されど、文詩のみは、美術のうちにも稍々音樂に似るところあり、人をして恍惚たらしめ又『無限』を靈覺せしむるに近しと雖も、字句のとありて、遂に音樂の如くなる能はず。又音樂の中にも聲樂の如きは稍々文詩に近く、聽く者をして、勢ひ歌詞に拘泥し、隨伴聯想をこの間に限り、神通自在なると能はさらしむ。是に於てか、音樂の本體は、之を器樂に藏すとや云はん、」また科學哲學のことあん。されど、こは美術の如く宇宙の實相を示めし或は覺らしむるにあらずして、これに到らしむるものなり。殊に科學の如きは、其格る處たゞ擴大なる『無限』の一小局部に止る。之を音樂のそが大局を現示するに比すれば、如何の大差ぞや。故に、哲學科學は、歩々着々鞠躬如として梯子の階段を上るが如く、一階又一階、漸く遂に堂に入るなり。音樂は然らず、一躍千里、忽ちにして天に達する翼の如し。このところ透明にして、眞となく善となく美となく相群がること、神の宮居に天使の集ふが如し。されば、音樂によりて、吾れ人の感得するところは、必らずしも眞のみにあらず、必らずしも善のみにあらず、必らずしも美のみに非ず、眞と善と美との相混和せるものなり。觀じて此に至れば、樂や實に大にして、しかも複雜なるものなれ『自然』の造りませるもの丶うち、『人』なるもの尤もよく『自然』に似て之を小

宇宙といふべくんば、我は、人間の造りなせるものゝうち、音樂は尤もよく人間に似たるもの——否な寧ろ自然の大宇宙に近きものと言はむかな。小を棄て大を取るとは、これぞ樂のよなりけらし。換言すれば、尤もよく大宇宙の實相を發揚するものは、乃ちこれ音樂なりとのこゝろなり。されば、眞の樂人たらん身は現實の差別界を離れて、無差別界に入り大宇宙の『無限』に觸れし人ならざるべからず。然からずして、我れよく樂を彈奏すと言はゞ、これ僞のみ。往古の民が太鼓に神靈ありとして拜めるも理なれや。樂のうちには『自然』の神宿り給ふ。樂人は乃ち其が祭司の長とも亦禰宜とも觀ずべきものなれば、造次顛沛の間にも、終始齋戒して、清淨潔白ならざるべからず。其主觀のたえず客觀と合して、齷齪たる小理想に跼蹐すべからざるは素よりなり。この事なくして樂を奏彈するも、遂に全く無意義のものとなり終はるべく、乞食の叩く缶は、そのうちに物乞ふほどの哀さを宿すべけれど、かゝる樂人のピヤノ、ヴァイオリンなどには、果して何をか宿すべき。げに思ふさへ憂たてきことならずや。樂人もしよく宇宙の實相たる眞善美に體覺し居らば、そにエキスプレッションとなりて樂の上に顯はるべく、樂人又よく清淨潔白ならばそはケャラクターとなりて同じく樂の上に顯るべし。モツアート。ベートーフェン。アンブロツズ、トマスなど皆な然りしなり。而して樂の生死如何は擧てこの發動樂性の二者にあるべければ、まづ常に哲學文學の如きによりて其思考力を訓養し、加ふるに宗教の靈覺修行によりて、心神を透明靈智のものたらしむるに勉めざるべからず。古より樂の大家の概ね皆な宗教の心厚く哲學詩趣に富めるは、是が爲なり。然りと雖も、亦ハイドン、ヘーンデル、モツアートの如く無學のものあるは如何と疑ふものあらん。されども、こは天才の業にして世の常のものならず。我れ必ずしも佛道の輪廻説を信ずるにあらねど、此の種の人は現世に於てこそその修養を加へざれ既に遺傳法の蓄蘊により、或はさる神秘なる前世に於て、同くこの訓練を經たるものなり。而して人間の悉くは、ハイドン、ヘーンデル、モツアートの天才あるに非ず、是れその修養を要する所以なり。

さればとて、技術のと決して輕す可らず。それ活潑なる精神は健全なる身躰に宿るてふ諺の如く靈妙なる發動と樂性とは必ず又靈妙なる技術の上に非ずんば宿らず。大王は匹夫の陋屋

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に位し給はず。いよせき賤が伏屋は、(稀には古今の英傑もその間に潜めど)賤の緒環くりかへす翁媼にはよけれ、貴顕の住家にふさはしからず。人あるも家なくば、果して何づれにか宿借らん。願くは靈妙なる發動と樂性とをして、その居る處なきに惑はしむることなく、これに適ふの家を與へよ。然れど、勞苦額に汗して柱を建て家を構ふるも、その、人を宿すためのものたるを忘れ、家のために家を建てたるが如く思はゞ、これ所謂龍を畫て心を入れざるの愚ならずや。されば、ナイトが『結構の美、形容の美は必らず先たゝざるべからず、されど、樂性の美發動の美も亦必らず續かざるべからず』と言へるこそ無類の名言なれ。

なほ一の云ふべきあり。人間の精神現象の常にリズム(調波)をなすこと之なり。それ樂の躰は運動にして、又常にリズムをなす。されど、彫刻建築繪畫の如きに至ては、絶へず靜止の位置にあるものにして運動なるものあることなし。かの文詩の如きさへ、之を誦讀するにあらずんば、決してリズムをなすに至らず。是に於てか、是等のものは、運動絶ゆる時なく變轉限りなきの人心を描寫して、之を傳て眞に迫ること能はざるが如し。况んやその一上一下高低極りなき感情の發展をや。之を能くするもの、美術中それたゞ一の音樂あるのみ。踏舞は稍々これを能くするに近しと雖も、その運動や形容にあり。故にかの靈妙なる精神現象を寫すこと、音樂の能巧に及ばず。かの感情の時に低く、時に怒り、時に笑ふは、なほ樂の一調一節或は上り或は下り、以てリズムを絶たざるが如く、兩者の間たゞ僅かに寸分あるのみ。故に音樂は人間感情の走るところを傳ふること頗る容易なり。されば、精神現象と音樂とは二にして其實一なるものゝ如しとや云はん。是に於てか、歐西の詩人數々『心の聲に聽け』といふ。未た『心の畫に觀よ』『心の彫刻、心の躍りに觀ぜよ』と歌ひしを聞かず。又原人の、未だ畫文彫刻のことさへ考へ及ばざるの前、早く已に音樂踏舞のことを發明し、感激極るものあれば、必らず歌ひ踏れるが如き、これその精神現象殊に感情の發展なるもの、頗るリズムをなして、音樂或は蹈舞に似たるものゝ故に非ずや。かくの如くなるを以て、樂人たらん人、若し人心機微の消息に感通し、感情の迸るところを察し、之を我が樂中に寫し收めたらんには、よく人情の鏡となり、世道人心を感

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

激流化することと實に尋常ならざらん。ワグナルが近頃に至り物狂はしき迄世に歡迎せらるゝは、かの詩人バイロンの迎へられ、ゲーテの『若きウエルテルの煩ひ』が悦ばれたると等く、よくこの人情隱秘の間に通じ、巧に之を發展したるが故なり。然り而して、英雄にして始めて英雄の心を知る如く、自ら感情の豐かなるものあるにあらずんば、又天下の感情を知るは難し『故に又樂人たらん身は、感情の修養に重きを置かざるべからず。是に至りて、再び助けを借るべきは、文學と宗教となり。我すでに數々宗教を云ひ又靈智清淨を云へり、されど杓子定規のストイック道德は我が勸むるところにあらず。これ却て天賦の靈性を殘害し、頗る偏屈固陋のものたらしめ、樂士たるの趣味を傷ふこと多ければなり』故に樂士の德は德を離れて德に立ち、道を離れて道にある『老子』の道德ならざるべからず。即ち宗教道德ならざるべからずとのこゝろなり。

之に加ふるになほ一の勸むべきことあり。我邦の如く泰西文明の移植せられてより其日なほ短かく、且つ國語の欠點尋常ならざる今日にありて、社會生存に直接の關係最も少き樂の如きを學ばんと欲せば勢ひ泰西の國語に通じ、其書籍を咀嚼し、以て養ふところなかるべからず。況や其學ぶところ西樂なるに於てをや。物必ず相連關す。泰西の宗教文學を味あはずして、西樂を解せんとする夫れ難い哉。故に日本音樂の最高教育府にある音樂學校專修部生の如きは、宜しく外國語の研究を重しさし、一ト通ゝ英佛獨の一語に通ずるに至らんことは、頗る望ましき次第なれ。此くの如くにして、外國語の素養ありて、泰西の一般に通じ、宗教文學哲學によりて、人情の蘊奥を發き、よく宇宙の實相に觸れ、自由にして清淨たり、技術また靈妙ならば、これぞまことの樂人にて、輝けるフォーバスの男神と、月に弓張るダイヤナの女神と共に驚き悦ぶものならめ。昔はモツアート、或る熱實なる耶蘇教徒を嘲りて『耶蘇は宗教を其頭に持てど、我は之を我が腦に持てり』と曰へり 嗚呼我邦現今の樂士中、此る大膽なる宣言をなし得るもの、果して何人ありや。かの聾にして聲音をきく能はず、志かもなほ天地の實相に觸れて、尤も美はしきシムフオニーを作れるベートーフェンこそ、實に我がもとむるところなれ。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

雑録

海舟翁南洲談

◎西郷と云ふと、キツ相な貌を爲て居たよふに書かぬと人が信じないから、あゝ書くがネ、極く優しい顔だつたよ。アハハなどと笑つてネ、温和しい人だつたよ。

◎ナアニ、維新の事は、己と西郷とでやつたのサ。西郷の尻馬にのつて、明治の功臣もなにもあるものか。自分が元勲だと思ふから、コウなつたのだ。

◎江戸の明け渡しの時は、スッカリ準備が仕てあつたのサ。イヤだと言やあ、仕方がない、あつちが無辜の民を殺す前に、コチラから燒打のつもりサ。爆裂彈でも大層なものだつたよ。あとで、品川沖へ乘てるのが骨サ。治まつてから、西郷と話して、あの時は、ひどい目にあわせてやらふと思つてたと言つたら、西郷め、ハハア、其手は食はんつもりでしたと言つたよ。

◎ナアニ、己の方よりか西郷は非道い目にあつたよ。勝に欺されたのだと謂つて、ソレワ〳〵、ひどい目にあつたよ。

◎西郷の事は、ズット前に順聖公(薩摩齋彬公)から聞いたよ。お庭を一處にあるく時に、傳達があつたよ。『西郷吉之助と云ふものが一人あるが、人と云ふものは、ソウ早く用ゆるものでない』と言われたよ。ソレハどふして、ゑらい方であつたからネ。西郷は始終叱られて敎わつたのサ。

◎征韓論ナンテ、馬鹿な事があるものか。西郷の考も知らないで、其志をつぐなどと云ふから譯らないのだ。己はあの時、海軍卿だ。戰爭のつもりなら、話しがあらあネ。あとで、一躰お前はどふするつもりだつた』と話したら、アハハ、笑つて、『あなたには分つてませう』と言つたよ。ソレ切サ。

◎久光公ともめてネ、それはひどかつたよ。西郷も弱つて仕舞つたのサ。大久保からも段々賴むしネ、ソレに三條公から懇に話しがあつたのサ。己は嫌だから、御免だと言つて斷わつたら、三條公が手紙を見せて、夫でも西郷から斯ふ言ふて來た、どふか勝をよこして下さい、そふすれば治まると云ふのサ。己は、かふ見て居たが、ひどく感激したから、夫なら

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

行ませう、明日は長崎邊へ御用があるとして書付を下さいと言つて、夫から行つたのサ。夫で、譯はない、直に久光公を連れて來たが、それは〱西郷なんて云つても小僧のやうなもので、其時驚ろいたよ。久光公のお付の老人で、二三人八釜しやがあつて、中々聞かない奴だつたが、夫に話すと、ナニ、あの吉之助ですか、あの小僧がと云ふ調子サ。

◎夫から、モ一度ソンナ事があつて、大久保が來て、態々、頼んだ。モウ二度とコンナ事はお頼みしませんと言つたのだもの。十年の時は、もふソウ〱頼めまいヂヤないか。其時は岩倉公から話しがあつた。西郷はどふだらふと問われるから、西郷は決して出ませんと言つた。スルト、少し立つて、西郷も出たソウヂヤないかと言われるから、出ても決して指揮はしませんと言つてやつた。西郷が謀叛の巨魁になるよふヂヤ、西郷の西郷たる所はありやしないよ。果して、西郷は終り迄、一度も指揮はしなかつたよ。夫から又岩倉サンが、大層、御馳走をして、どふか一つ行つて治めて吳れまいかと頼まれるのサ。ソウ〱己もいやだから、斷わつたが、たつてと云ふ頼みサ。夫なら、行ないものでもないが、全權ですよと言ふと、全權とはどふ云ふ事かと云ふから、夫は何を爲るか分りヤアしません、大久保でも木戸でも免職位は仕ますと言つたら、夫では困ると云ふから、ソンナ事なら行くには及びません、公卿でもおやんなさいと言つてやつたのサ。其時のお使が佐野だ。たしか、佐野の所で御馳走だつたらふ、佐野が證人にしてあるよ。大久保も、ソウ〱は勝に頼めないと言つたソウだよ。男だからネ。

◎どふして、西郷が居なければ、維新の事は出來ないよ。西郷一人でまとまつたのサ。

◎あの時は、然し、德川はどふしても持ちこたへられん。大言を言ふやうだが、一年丈は長引かせたよ、色々に引張をこしらへて。ダガ、仕方がない、段々、コッチから、プチコワシ大工をやつて、自分でコワスのだもの。

◎己なら、一兵を用ゐずして德川氏を倒すと言つて居たのサ、ひどい人だと云つたが、仕方がないそふだもの。箱根に兵を置いて防ぐとか、なんとか、八釜しく言つたものもあるがネ、ナアに、そふすりやあ、江戸の一二ケ所に火を放つて、敵兵が既に入り込んだと流言させりやあ、箱根の兵は驚ろい

て逃げて却るよ。スルト、官兵が來たと云ふもので、同士討サ。きまつてらあ。ソンナ、馬鹿々々しいヿをするよりは、寢て居るつて、前の日迄で、内にぢつとして居たら、アナタは國家の大事を考へん、姦物だとか、不忠だとか言つて、夫は毎日々々八釜しかつたよ。どふして、向ふが西郷だもの、外の奴なら、また仕様があるがナ、西郷は譯が分つてるもの、安心なものサ。己はチヤント、見込をつけて居たよ。ダが、用心は用心だから、毎晩、夜半から、辻駕で、ホイ〳〵と出て行つて、夫々急所々々に頼んで置たのサ。召出したりなにかして、何を聞くものかナ。己の顔で頼むよと言つて、頼むのサ。夫も、コウ〳〵だと譯を言ふと、モウだめだよ。其邊の事は話すヿは出來ない。あとで、ミンナ、ハハア、そふ言ふつもりでしたかと言つたよ。

◎西郷だつて、あの時は議論がまとまらないので、毎日々々小田原評定サ。ソレデ、一日、西郷がフイと見へなくなつた。勝と大久保が又出たそふだから、江戸に花見に行くと云ふ手紙を友達の所にやつたソウナ。それで、先生が見へなくなつた、何處だ〳〵と云ふもので、門下生が二三百人もついて來た。夫が、官軍の初まりサ。己も、西郷が何如するか知らと見て居つたが、スーツと機に乗つかつて出て來た。まだ〳〵中々來まいと言ふうちに、早や靜岡、早や小田原とやつて來たよ。どふして〳〵ぬかるものヂヤアないよ。

◎ソリヤア、西郷が第一サ、大久保になると、少し小さくなつたナ。木戸と來ると、もふ急いで仕方がなかつた。ダが、あの三人は、なか〳〵今の功臣のよふな、やにつこいものヂヤアない。どんな事が來ても、其手は夙から知つてると云ふ調子だ。

◎西郷位のやつが、もし爲るのなら、ひどく、いぢめてやるが、ナニ、今の人は皆な、人が善いのだもの、氣の毒でならないよ、相手にするに足りないヂヤアないか。

◎勝田の西郷傳はよく出來た。今でこそ、鹿島の人もかれ此言ふが、あの比は釜やあしない、ミンナ黨派があつて、其の黨の人だけしか有がたがりあ爲なかつたのサ。

◎十八日には、出て演說しろと云ふから、ソンナ馬鹿な事をと云つて斷わつた。また〇〇が來て是非にと云ふから出るのだが、コウ云ふ歌をよんだ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

せめつゝみみはたなびかしたけびしも
　昔の夢のあとふりにける。
咲花の雲の上野にもゝつたふ
　いさそのかたみたちし今日哉。

あんまり、きまり過て嫌になつたから、も一つよんだ、

君まさば語らんとの浮なるを
　南無阿彌陀佛我も老たり。

◎これ位ひの國だもの、西郷位の奴が一人か二人ありやあ、夫で治まるのサ、ナンデモありやしない、人才々々と云ふが、そふ餘計にあるものヂヤアあるめいと言ふのサ。

◎橋本佐内の事かい、何に、ソンナ事を面白く書くのサ、本が賣れないからテ。

◎耶蘇教徒の扱かひの事は別に書いて置いたものがあるよ、西郷も默して仕舞つたよ。

◎「勝サンは、大奥を甘まくお遊んなすつたが、私は弱わんましたよ」と言ふたよ。薩摩の改革の時に、老女にチイ〳〵泣きつかれて弱つたとよ。

月前述懐

紫　[illegible]

世の中を　おなじく照らす
大空の　月にはあれど
見る人の　こゝろのまゝに
いかなれば　かくもこと〳〵
　にほふなるらむ。
琴の音も　見ゆるばかりに
さやかなる　月のひかりに
細殿の　小簾まきあげて
見る人の　心やいかに
　のどけかるらむ。
草まくら　むすびかねたる
ひとりねの　つゆの袖に
つく〳〵と　ふけゆくかげを
見る人の　心やいかに
　わびしかるらむ。
山たかみ　月かげ白み

ふく風も　きよ見が浦に
舟うけて　波にまかせつ
見る人の　心やいかに
すゞしかるらむ。

さやかなる　月のひかりに
亡き人の　あとやてらすと
いたづらに　みそらを仰ぎ
見る人の　心やいかに
さびしかるらむ。

大ぞらの　月もくだけと
うそぶける　虎もにげゆく
韓山に　太刀ひきさげて
ゑむ人の　心やいかに
をゝしかるらむ。

世の中の　人のこゝろも
ひとつなる　月をながめてし
大神を　たゝへまつらむ
その折の　心やいかに
うれしかるらむ。

吉原の夜景

（橋場楽人訪問のかへるさ）

有美

慾には、目のなき人間の淺ましさ、十方世界の萬寶を、竹の熊手に一とさらひにさらはんとしてか、なるべくは人よりも大なるをと、酉の市に急ぐもおかしや。げに是は東の都の名物と聞くほどにて、人の流れの潮の如く、吉原を目がけて進みゆくも、仲々に見ものなり。この流れのうちにだに入らば、帆を揚げ櫓を操るの勞なくとも、船の如き身は、志らず〳〵「お鷲さま」の前にと出づべし。こゝに到るものゝ悉くは皆な、熊手に縁喜を祝はんとする輩にあらず、又横に流れて廓の繁盛をかひま見んとはするなり。盆正月の十六日ならぬに此所の地獄ばかりは、前の夜半は十二時頃より、四方の非常門を明け開き、押しくる人群を迎へんとするも、こと〳〵しからずや。まことに、辨財天の、七福神の一柱にて、美人にますも面白し。財貨の隣りには、必ず淫樂の神其宮居を定志給ふものぞ。其三層四層の高樓の、軒を並て聳へたるは、はでやかと言は

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

んより、寧ろ何となく暗澹たる臭味を帯て、地獄の建物とは此るものにやとの思ひす。されど張店のところのみは、瓦斯の燈電氣燈の光などまばゆく、赤青金襴の衣美はしく、世の人と異る裝ひせる婦どもの、後に張れる鏡に影をうつして居並ぶさま、龍宮の乙姫見る心地のせらるれ。その丸格子の間より半ば顔さし出でゝ、客を引かんと騒くは、かの動物園の熊が、檻の鐵格子に鼻すりあてゝ、見物人を面白がらしむるに似て、いと〳〵哀れなり。『引ッぱり』とか稱ふる若衆の、勇ましげに『よく、ご覧なすッて……御意に召したのを……精々お安く致します……ご酒を一本つけて四拾一錢に……その上決して頂きません……』など叫びたてゝ、道通る人を呼び入れんとするを聞ては、最早や、情ある人の忍ぶべからざるところなるらむ。げに女郎屋とは、人を品物に賣買するところなるらし。されど、何處の店を覘き見るも、廢娼論者などより聞く如く、憂し苦しと惱み居る面持の、一向に見えで、いづれの女郎衆も皆欣々然たる樣子に、小さき化粧鏡を片手にしながら、白粉のはげかけたるを繕ひ居るさま、愈々哀れなり。よく、きけば、客さへ絶えずば、かゝる商賣ほど面白きはなしと、概ね悦び居るとのことなり。左かはあれど、一人の眼を頬へるものにや、黒き眼鏡をかけたるがあり。客にふりつくこともなく、主人のためには、めでたく思はれざればか、志よんぼりと寂しげに構へて、心ある人の涙を促せど、心なき若もの共は、よき笑ひの種を得たるよと、口々に罵り騒ぐも、つら憎くし。あゝ、夫を聞く彼の女が胸中、果して如何にやありけん。そこ此處の店頭に、女郎がつけ出す煙草の煙管を、こよなくうれしがり、うはべながらのつまらぬ物語に喜悦する若者ども、また氣の毒のものなれ。さる日、鐵道馬車に主人らしき人のありて談るを聽くに、その家の小僧ども、毎夜床につく前、必ず廓を素見し來ずば、安き心もなしと。それも、理りや。我が邦には男女の交際塲といふもの、外になければ、たゞ女郎屋の店頭のみ、そのところとなるなり。悲しひ哉、人に異性の交際なくては、かなはじてふ天性に激せられて、而も此の汚れを爲す。之を思へば、彼等もまた哀れなり。

吉原とは、かくまで廣きところなりとは思はざりしに、ゆき見れば、思ひしよりは仕掛の大きく、優に一大部落をなし居るには、驚より外なし。並々の廢娼論は唱たればとて、斯る邊には、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

蚊のとまりしほどの痛傷もなかるべけれ。東京の廢娼は革命によりて、血を見るに非ずば、行はれじと思ひき。かくて、そこ〻も珍らしきまゝに、うろつきまわりつゝ大門を出で、また流れの中に加はりて歸れば、十二時を過るの頃なりき。エスキモーの如く、ドテラ襟巻に固めし身の、ながめ觀れば我れながら亦た淺ましき哉。

木戸松菊逸事

左は木戸松菊に多年從隨せし人の談話なりとて台灣の新紙に出づ、后に其の夫人となられし人との逸話なり。

お松さんは長いこと華奢風流な花柳街に育てられまして、勿論今時分の舞妓や何かと質が違ひましたにしても、懐中には只の十五文丈持ちまして、大坂からはる／＼但馬路を指して一人旅をしやうと云ふのでおますから、隨分憐れなお話しごすわ、貮まの奥さまが逝なられまして此お松さんが奥さまに直られましたが、木戸はんが京でお逝れ遊したことを聞かれて、髮を斷て尼はんになられました程、心操の堅固なお方方んでした、貮まの奥さまと云ふのも、操の堅いことはソラお話しする迄もない事ごしたが、併しお松はんの方は斯んな艱難苦勞しやはりました丈な、ドウも人情には厚いお方で萬事に氣の附くことは誰れでも感服する程ごした

デいよ／＼京を立ちましたのは二月の末、時に因ると三月の初で有りましたろか知りまへんが、何れ何でしたあの年は早く春になりましてな、モーそろ／＼櫻の蕾も大きうなりまして野山には若草がにほひ渡り鳥も遊て來ると云ふ時節で、呑氣な春遊びをするには極宜い時候ごしたけれど、お松はんは何を言ふにも貮まの憂き旅で、自躰東西も別らぬ位のものごすがな、只木戸はんの安否を案じなはる一心で覺束なく杖を引かれて、夜は勿論宿屋に泊ると云ふ譯にゆきまへんから、野山の畑中に藁小屋でもあると其處で露けき夢を結びますとか、鎭守の森の祠に宵もすがら泣き明かすとか云ふ艱難な嘗め盡しまして丸でモー乞食同樣の姿にならはりましたが、其れでも一心と云ふものは恐ろしいもので、トウ／＼無事に出石の御城下へ着かはりました、ヤレ此れで安心だ先づ兎も角木戸はんの處へ行かうと思はれましたが、イナ／＼左樣でない木戸はんも今は昔と違はれて世間の目を忍ぶために荒物屋をお開き遊ばしたと云ふとであるから、斯んな見じめな姿で店先きへ立たら、喫驚なされて時によると飛んだ御迷惑をお受けなさるも知れない、日が暮れてから竊とお尋ねする事としてマー其れまでは町外れに離れて居ましやうと云ふお心で日の暮れるのを待て居られました、此れがソノ何んでおまつしやろほう貮まの一日千秋と云ふのでおまつしやろ

日が暮れると行かれましたな、木戸はんの例の荒物屋にな、成程敎へて呉れました通りの町が有つて家もありました、そこでお松はんは其家を尋れますと宵の中であるのにモー戸が締つてありますので、マーこないに早寢をして商賣になるやろか貮まに阿房なお方はんやなと呻やきながら、そこになりますと流石女ですわ垢にまみれてボロ／＼になりました袷の襟をかき合せまして、話し家口調ですがトン／＼／＼と表の戸を叩きまして、御免やす／＼と二三度呼んでもお返事がおまへん、今度は木戸はん／＼と呼び立てられましたが矢張内には聲がしまへんので、別に仔細もあるまいと思はれますから、ナーニ店と言へば店、何一つ品物がおまへんのでおますもんかなと言ひながら、奥へ行きますと木戸はんが煎餅蒲團に引つくるまつて寢て居やはりますのでコレ木戸はん／＼と呼び起すと、此時は貮まに可笑しかつたさうで、木戸はんも寢惚眼けでな貴君、フイとお松はんの顔を見ましたがドウ見ても此が幾松はんの昔と思はれまへんや、處が自分の本名を呼んで馴々しく呼びかけるもんやから木戸はんも面喰つてな、貴樣は何んじやい無禮者、出てゆけッてな、橐う怒らはつたさうごしたが、能う見ると矢ッ張お松はんなので、ヤごうしたんや松じやないかと云ふとにならはりまして、此が後に江戸へお越しになりました時にもな、ドウかすると木戸はんがおからかひなされて、何時も大笑ひの種ごした

女でこそあれお松はんは長いこと木戸はんに伴れ添ふて居ましたので、中々能う御政治向きの事に目を附けられました、然し一度だつて其れを木戸はんにお話しなされた譯けでもおまへんが萩に居られました時分お國の事を能う注意されたとですから、其れを有りの儘に木戸はんにお話なされました、此の頃又お松はんが出石へ參られまして間もなく、ドウした間違でしたか知りまへんが、今度桂小五郎が女の姿になつて出石へ逃げて來たから幕府の手が廻つて今にもお上に召捕げられると云ふとがダーと世間に傳はりました、かた／＼茲に居られまへんのでいよ／＼長州へお歸りなさる相談が調ひ、四月の始に旅に出られるとさならはりましたが、今度はお二人伴れでおますから寂しいとは一向おまへんやナー貴君

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

隨感

○年の暮

水行究まつて亦た通ず。もし折々の歳の區限のなからましかば、長汀曲浦の趣きも心には求めがたし。花にうかれ、月にかこち、雲煙の行衛知られぬにむせぶなど、其の日、其の夜の物思ひはあり乍ら、鏡に向つて齢の老ゆるを覺らず、指を屈なへて年の積もるに驚ろかず、只だ一歳の末路日の將に消えんとするに迫りてのみ、はたと思ひ當るとのあるものなり。考ふれば、水は流れて休まず。日は出でゝ息まず、日々の送迎豈に他あらんや。左るにても苛しきは年の暮にて、世の人なみに心忙わしく、千々に反省して來し方、行く末を懷ふ。正さにこれ天地自然の指圖と觀じて、嚴かに吾衣襟をとゝのえ、謹しみて道と、人生と、吾歩みとを慮ばかる。歳月は究まつて亦通ずべし、吾所懷は奈何ん。孤燈烱として消えず、吾が胸中最底の光明はいかに〳〵

時文

●文界漫言

ちやうてい

◎字音假名遣改正の議

我が國語及び字音の假名遣の煩雜なるとは、初學者の甚だ苦しむ處にして、たゞにしかるのみならず、既に文章に從事するものと雖も、之を難んずる處なり。されば國語、字音共に、いゐ、えゑ、はわ、おを、いゐ等を一に定めては如何やといふものも尠からざるけれど、習慣に制せられて、殊更に之を斷ずるものなかりき。然るに此度、文部省に於ては、字音假名遣改正の件なれば、左表の如くに定め、自今師範學校、尋常中學校、高等女學校及小學校に於て、即ち甲欄に掲ぐる從來の假名遣法を廢して、乙欄に掲ぐる方法に依らしめんとして今回高等女學校以上の意見を徴せし由なるが、各學校にては、職員會を開きて、夫々之を協議して、概ね贊成の趣なれば、可決答申の上は、文相に於て、更に期日を定めて、其實行を命ずるに至るべしと報ず。其方法は即ち左の如し。

甲		乙
い	ゐ	い
え	ゑ	え
お	を	お
か	くわ	か
が	ぐわ	が
け	くゑ	け
げ	ぐゑ	げ
じ	ぢ	じ
ず	づ	ず
わう	はう	わー
まう	もう	もー

甲					乙
あう	あふ	おう	おふ		おー
かう	かふ	こう	こふ	くわふ	こー
がう	がふ	ごう	ごふ	ぐわふ	ごー
さう	さふ	そう			そー
ざう	ざふ	ぞう			ぞー
たう	たふ	とう			とー
だう	だふ	どう			どー
なう	なふ	のう			のー
はう	ほう	はふ	ほふ		ほー
ばう	ぼう	ばふ	ぼふ		ぼー
ゆう	いう	いふ			ゆー

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

きう	きふ	きゆー
ぎう	ぎふ	ぎゆー
しう	しふ	しゆー
じう	じふ	じゆー
ちう	ちふ	ちゆー
ぢう	ぢふ	ぢゆー
にう	にふ	にゆー
りう	りふ	りゆー
らん	らむ	らん
あむ	あん	あん
なむ	なん	なん

む字とん字との用法は總て右の例に准す

やう	よう	えう	えふ	よー
らう	らふ	ろう		ろー
きやう	きよう	けう	けふ	きよー
ぎやう	ぎよう	げう	げふ	ぎよー
しやう	しよう	せう	せふ	しよー
じやう	じよう	ぜう	ぜふ	じよー
ちやう	ちよう	てう	てふ	ちよー
ぢやう	ぢよう	でう	でふ	ぢよー
にやう	によう	ねう	ねふ	によー
ひやう	ひよう	へう		ひよー
びやう	びよう	べう		びよー
りやう	りよう	れう	れふ	りよー
みやう	みよう	めう		みよー

今日の日本人は、漢語を用うるに、四聲の區別を知らぬことなれば、類似する發音を一躰に定むることに障害たるべきものなし。而して文部省のいふが如くに、例へばみよう、めう、みやうを「みよー」に定めんも、また「みやう」にも「めう」にもいづれにでも定めしむることを得べし。然しながら、くわとかとを一つにすることは、幾多の故障あるべし。「くわ」の發音は明かに人のなし得る處にして、勿論、或地方の人は、双方を混同するあれども、通常は別々に發音せらるゝものなれば、其區別を存すべし。(くわうは此限に非ず)發音し得べき發音をも發音せしめざるは、語學の教育上甚不利ならずや。もしそれに混同し易きが故に、一に定むるといはゞ、奥羽人には、「ち、つ、こ」は、「つ、ぢ、づ、じ、ず」は「ず」とせざるべからず。信州人には、え、いを同音となし、房總地方人には、「あ」と「な」とを一音とし、南部九州人には、「ろ」と「ご」とを一音とせざるべからず。又「ぢ」、「じ」とを「じ」の一に合しながら、「ぢよー」、「じよー」を區別するは如何。また「ー」といふ、曖昧なる符徵を得うるよりは「う」を得る方、優らずや。字音は不完全ながらも、この様に改正し得べしとするも、國語の方は、如何すべきや。和語の假名遣は、字音のに増して煩雜なるものなるが、扨て、其名詞及び動詞の上、中に在る誤り易き發音は、一に定め得べしとするも、動詞の語尾にある誤り易き發音は、動詞變化の法則に故障あれば、一に定むるとは難し。されど字音の假名遣に改正を加へながら、和語の假名遣に改正を加へずしてあるべきに非ず。

然るに單に簡短々々といふを根本のモーチーブとして、相近き發音を一方に定むることは、言語發音の上よりいへば、不幸なるべし。日本人には、元來異なる發聲の數、尠き故に、外國語を學ぶに最も不便なり。今は學生等、外國語の種類多き發音を學ぶものなるに、國語の發音數を成べく減少するは得策に非ず。されば、字音、和語共に、出來得べき丈、發音の變化を、小學校より初めて、子弟に教授して、舌の働きを練習せしむるは、語學教育上、採るべき方法に非ずや。もしかくの如くにして練習せしめなば、今日の如くに假名遣の煩雜に惑ぜらるゝ事は、自然薄らぎ行くべし。

◎藤村の新作『夏草』

島崎藤村氏、曩の『若菜集』『一葉舟』に次ぐに、今又た『夏草』の新篇を出す。之に收むる處の新詩十四篇。此度は、前二卷に異なり、挿畫は、新派の日本畫家の作六を以てす。

詩は即ち『晩春の別離』『曉の誕生』『終焉の夕』『月光五首』『うぐひす』『かりがね』『新潮』『わすれ草を讀みて』『高山に登りて、遠く望むの歌』『二つの泉』『天の河二首』『落梅』『婚姻の祝の歌』『農夫』等なり。或は、月に歎じ、花に泣き、月に哀れぶ、別けて悲しく歌ふ處のものは、戀なり。藤村の詩より戀を取除けば殆ど詩なからんとす。

其『農夫』は、藤村が今夏、みすゞかる信濃の奥に隱れて、意を錬り、想を綴ひたる作なりといふ。吾人は、早くより此作あるを聞けり。而して、これ農夫の生涯の苦樂境の、市人得て解せざる邊を歌ふものならんかと思ひしに、其歌ふ所を聞けば、これもまた一の失戀物語なり。評者は、この詩に於て、農夫の特色を聞く能はずして、名は農夫なれども、其實は、これまた西洋の詩でも吟じ、ピアノ位を彈ず(笛を吹くよしはいへれど)る情熱ある文學者のやうに思はるゝは如何に。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

凡そ藤村の詩たるや、評者の如きは、之を讀むに當りて、その如何なる題目を以て歌はれたるにも拘らず、何れも、藤村自身を吟出するものならざるなきの慾あり。

藤村の詩形は必ず『七五調』にして、談話体を好む事、『夏草』に於ても然り。之には、新趣好きの事は厭はれれど、箇好、うたふ事の好きなるは、度々見えたり。評者の如きは、新体詩の妙趣さか、詩想の幽玄なる趣写を解するの能に乏しきものなるを以て、『夏草』の如き、之を評騭するの構能なきものなれど、たゞ通読したる際、心につきし事どもを、かくはいへるなり。而して同人は三集を通じて、大に評論を加ふべしといへば、彼に委して、今即ち筆を爰に擱く。　妄評多罪

新刊書

◎第四世伊藤長次郎傳○晩黄詩存。

播州印東郡今市にて俗に千町長者の稱ありし伊藤長次郎翁の傳及び詩集を寄せらる。伊藤氏、此翁に至つて四世、創租以來積德あり謙譲あり餘慶此に至つて大いに煥發せしと云ふと雖ども、此翁再興の力與つて尤とも力あり。身を治め、能く富み、能やかに惠み、清らかに歌ふ、此翁の如きは稀有の好好人にして、貨殖二諦を同化し、宗教現世の連環を見るす好適と云ふべし。凡そ商家は皆な素養あり、名家は必らず克已あり、此書一小册と雖ども、悉さに興家守成の秘訣を教ふ。伊藤氏第二世の遺訓五十四條の中に云へるとあり（近刊雜誌拔抄せ存）

家を破る基と身を亡ぼす基と一緒なり。

長壽の藥と家の調藥と同じ事なり。

吳服屋は淺は口にも穩和な事を云て内證を去かさぬより居るが大によし、干鰯屋は淺も内證もしまつ顔をしてしまつするが大によし。

我身勤めて人にはくしやく云ふな。

仕事は晝夜きつと致すべし、大家も小家も其家々の仕事あるものなり、ぶしようものわるし。

倹約は即道なり。

今日より驕奢と思ふ人は一人もなし、是丈の事は大事なし是丈は大事なしと、ちりちりといつの間にやら驕奢となる、万事分限をせよ。

ききまは其樣にしていつ迄でいきる、又持て死ぬるかと云ふ奴あり、親の名跡あり、子孫あり、家は末代なるとを思はざる可らず。

皆是れ實驗體行の余に出づ、故に千斤の力あり。第四世長次郎翁、晩黄と號し詩を能くす。秋月天放の評して其詩大率清新流麗と云ふもの能く悉せり。其一二を錄す、

幽鳥聲多緑樹林　無人三徑賞沈吟　君爲輸器風流主
我有江湖遊浪心　擬石関斟斗瓢酒　倚松時弄一絃琴
去年盟約因何背　空望天涯恨不禁。
老去雖忘心上秋　児還客裏帶春愁　匆々二十餘年夢
花倘紅顔人白頭。

他に往々麗妙の新句あり。曰く、一白梨花月、淡青柳杪烟。曰く、風柳腰方軟、露花臉轉清。曰く、春歸人共遠、花盡水空流。

◎經濟漫言

橋本重兵衛氏の著にして、非賣品とす。橫濱に於て印刷す。本邦天保元年以降に於ける物價の高低、貨幣の變遷を詳かに調査し、一種の有益なる歸納を得たり。曰く、物品實際の價値は古今太差なし、之を貨幣の價値に比較すれば、古往今來其の大躰の格位を知ると。曰く、

天保度には蕎麥温飩一椀の直段は僅か八文なりしと云ふ之を錢相場にて割れば十二文三分となる、新金貨とすれば一錢一厘に當れり、其后十六文となり之を六貫五百文の錢相場とすれば廿四文六分餘に當れり、新金貨に換算すれば二錢二厘に當れり、左すれば現今と更に異なるとなし。

天保以降卅年間を通じて米一石代十二圓廿五錢に當るものとせば其の意外の高直なるに驚かるべし、明治元年より同三十年迄卅年間十一圓〇八錢とすれば、前后六十年間の平均は十一圓六十六錢五厘に當れり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

勞働賃銀は三十年間の平均相場廿九錢六厘なり。昻低何れも皆な一定の時期を經過すれば相當の位置に回る。

◎新小説　第三年第十二卷　春陽堂版

落寞たる小說界に、文藝俱樂部と、新小說とのみ、なほ多少の氣焰を吐けるは、目出度し。此號には、『西風吹夢』(佐野天聲)『心中烏月雨』(藤本夕飈)の二小說あり、二つながら、あまり名を聞かぬ作者にして、後者は、正直正太夫より、一葉女史の作を剽竊したりと非難されたるものなり。雜錄は露伴の『帳中書』宙外の『時文』及び『掘物家の談』など見るべし。實價一冊二十錢。

◎なつくさ　島崎藤村作　同　版

評は別項に在り、實價金二十錢。

新雜誌

◉經濟雜誌　一々正確、一々趣味、千古不易十年一日の觀あるもの、經濟雜誌の如きは稀なり。其近號(九五六、十二月三日發)には選擧法改正の要領を揭げ、例の如く精細斬新の統計表を示せる后ち曰く全國人戶の半は地主以外なり、之にも選擧權を擴張せざる可からず、新に一案を提出す、宅地々價を標準とするの議なり、其の格大約そ公定地價五圓以上の所持人に選擧權を與ふるなりと。同號に白川樂翁の三草集抄錄を載せたり。

◉農業雜誌(六八一號)　現存雜誌中最古の一たる農業雜誌は本號に於て其薺社員同窓會の記事を揭ぐ。

◉反省の鏡(第三年第九號)　反省雜誌と兩々相對し、眞宗佛教中の尤も穩健進步せる思想を發揮するは此の女雜誌ならん。此號、社說に眞宗寺院の家庭あり、家庭欄に老坊守(僧侶の老婦人)の談話筆記あり、此等は只だ眞宗に於てのみ聞くを得る所るなり。播州印南郡伊保村の内今市の千町長者伊藤晚黃翁の傳は家訓あり、其家訓の中に云く、

寺は隨分中よくせよ敬せよ、布施は我身證相應に上げよ、輕きは徑を直切る罪なり。

乞食には通れとは云ふ可らず、家の大きな構なれば夫丈けに多分にやれ、大家が通れと云へば小家六七軒も斷はり云ふやうなもの也、夫を娑婆ふさぎと云ふ、又土のふたとも云ふ。

◉教育實驗界(第二卷九號)　淡路志筑小學校の竹越熊三郎氏除算九々呼聲の改正案を製す、甚だ面白し。谷將軍、高等師範學校に於ける演說筆記中に云く、明治十七年后學習院を監督するや一種の考より非常の改革を試みたり、即ち生徒にランドセールを負はしめ、機械體操、中隊運動をも課したり。十八年に學習院を去り森君と共に政府に入り、森君大に我說と合し、軍事的教育を諸學校に課したり。此事と雖ども非學風に關する者は皆切拔き蓄へ居れり云々。

◉經濟雜誌(第九五七號)　峯岸繁太郎氏(在布哇日本人耕主組合長)の演說筆記に云く、現にハワイにある日本人は奉公人なり何人の數になるとも勢力なし、今や歡過さるゝ間に土着せしめざる可らず、其事の行はれざる大元因の一は女の少なきとなり、在ハワイの日本人は、男二万千人あるに對し女はたゞ五千人のみ、之より非常の亂倫も起ると。

◉埼玉經濟雜誌(第六號)　柏壁の無若庵主人、縣下誘導の爲に發刊し笹下庵子執筆すと聞けり。地方雜誌に稀有なる體裁を存し、說話皆な摯實規厚なり。無若庵主人の文中に云く、一日一厘宛貯金し年一割の利子にて復利法にすれば、百年の後に達する金額は元利合計五万三百三十餘圓なりと。又、對鶴村舍主人の文に、我郡(柏壁町か)人傑なきにあらずとして列擧する中に云く、(忠)中島重太郎。(孝)田中彥右衛門。(智)新井啓一郎。(勇)島村繁。(學)中島端造。(畧)長瀨清一郎。(識)綠木市左衛門。(才)渡邊湜。(清)大作暢三郎。(剛)原又右衛門　(敏)篠田清嗣。(廉)高橋莊之丞。(權)大島寬爾。(正)飯野喜四郎。(信)は自ら當らんと。

◉大日本監獄協會雜誌(第百二十七號)　犯人の身體五官感覺と題する英人ハヴエロツク、エルリスの文の譯を載せて曰く、犯人は苦痛の感覺極めて遲鈍なり。眼力は通常よりも大に優れり。聽神經は比較的に遲鈍なり。臭感覺も下劣なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

映神經は發達せず。若年に於て多く煙草を好む。氣候の何如にて氣質に變化を起し易し。感動力中、最强の感情は、怯悃、戕列の畏怖、興奮嗜好物(酒色)等によつて發起すと。

◉田舍(第五號)　但馬村岡町に於て發行す、但馬に於て從來發行せしもの、揺寄文庫、青年同志、同盟會雜誌、北溟新誌、圓川新誌等ありしが皆止め今は唯此一ありと云ふ。昔し此地より出して小澤靡神師の手記の文を掲ぐ。又但馬出身三人物を表して云く、

(政治家)北垣國道、櫻井勉、石田貫之助。(學者)加藤弘之、森田一郎、習田鶴。(軍務家)濱尾新、久保田讓、若宮正音(刀圭家)猪子止才之助、北村徐雲、西村鼎三。(文章家)繩井雨江、下村三四吉、兒島一雄。(教育家)幣矢由一、饗野誠吉。(記者)森本駿、青木匡、乘竹孝太郎。(美人)石田直幸太郎、沼田宥庸、新井晴閣。(實業家)原六郎、池田謙三、中江種造

別に附記するものあり云く、和田垣謙三、河本重次郎、久保田貫一、濱旬常明、山崎悪門、百濟文輔等ありと。

◉帝國文學第四卷第十二　早稻田文學も既に跡を絶ちたる此頃、もの淋しき文壇に、ひとり文學を論議するものは、是なり。往時の氣焔を欠けるやうに見ゆ。天明の狂歌(羽衣)日本音樂史(岡澤鉦次郎)見るべきものなり。

◉舊幕府第二卷第十一號　相變らず、徳川の事蹟に忠實なり。鉄砲洲沿革及び江戸の水に、其昔を思ひやられ、春嶽公の逸事史稿は、實に有力なる史料なりといふべし。

◉東亞時論第一號　精神一變して明治評論となり、更に中外時論となり、時論となり、いま又、東亞同文會の機關になりて表題の如くに改まり、而して、精神以來、近衛公に縁故ありと稱せらる。東亞問題を研究するが以て目的とする旨にて、近衛公の帝國の位地と現代の政治家といふ論文あり。亡命の清客梁啓超か上副島近衛兩公書中には、敝邦今日輔弼貴邦安危之時大将相…即貴邦之孝明天皇也西后即貴邦大將軍也湖州今爲國貴邦之幕吏也などの語あり。

◉世界畫報第七號　例によりて面白し。挿畫よろしく、記事興味多し。殊に花の料理と人品、花守の相鶴師究さがし、其中にも分けて面白し。

◉教育實驗界第二卷第八號　學政の空論に苦勞するよりも、教育の實驗こそ、今は最も必要なれ。實驗問題は材料富し、兒童研究としては、高等師範學校幼稚園主事中村五六氏の幼稚園に於ける兒童觀察の一斑あり。

◉兒童研究第二號　卷首には米國兒童研究の泰斗スタンレーホール氏の肖像あり。高島氏の、我國に於ける兒童研究の發達は歴史的に兒童研究の由來を述べて興味あり、其他の研究それ〲に有益なり、母親の爲めの一欄、新に設けらる。言文一致體にて家庭教育上の要件を說きさとす。

◉教育時論第四百九十一、二號　多年數千の教育家の案內者となりて、體裁は十年一日なれども、內容の此頃偏侠に流るゝを歷々なるは惜むべし。文部次官柏田盛文氏の前內閣より引續きて、新內閣に留任せる擧動を目して、管仲の證に比する、當に求むる處あればなるべし。地租增徵と教育費と題して、地租いよ〱増加せらるゝこととならば、地方稅の教育費は、人民いよ〱負擔に堪へ難からん、こゝに於て其時は、必ず小學校教育費國庫支辨の必要ありと論ずる、議論要を得て、吾人の共同する處なり。

◉憲政黨々報第一號　自由派憲政黨の本領を語るものはこれなり。此黨派の眼中に在る憲政黨の分裂結果は、委しく載せてこれに在り。現に角に以前の自由黨々報よりも遠に立まさりて見ゆるは、分裂後、大に內容の變じたるによるものなるを知らしむ。

◉日本人第八拾號　今の雜誌界に嶄然特色を持して、文教の傳道をなすものは、實にこれなるべし。山縣首相の爲に、未來の失敗を以て過去の功業を沒せざらんとを說く言、一は政黨擴張の爲に計りて、進步、自由兩黨の特色を語る、能く實を盡くす。兩黨たるもの、寧に顧みて、此說を聞かずんばあらず。

◉反省雜誌第十三年第十二號　過去一年間の政治と宗教を說く中にも、佛教界の出來事を述べ、且つ佛徒が飛むるものは、實に彼等の覺醒一番せざるべからざる點なり、高楠順次郎氏の臨紙教育改良私見に、基督教に於て、日本皇帝に忠せよと云ふことが聞ゆるや否やとの疑問を爲せり。其他讀むべき文字の多きは、この雜誌の他に任する所多き所以なり。

◉女學講義七十號　將來の女子といひ、古代の女子道德といひ、其他載する處、

いづれも其諸の性質を發揮す。

◎女子の友第三十五號　材料の收拾に努むると、いつもながら敬服する處なり、寄書ことに面白き事柄あるを見る。

片々

●少女賤業禁止論　時事新報少女の賤業の禁止すべきを論ずるや痛切、これ實に社會改善上の一要件なり。如今諸新聞中、此種の問題を痛論するもの獨り時事新報あるのみ。政界紛擾の時に當りて、冷然として、人多く顧みざる問題を捉へ來るは、この新報、年來の特色。

●夫人の素顏　さて報知新聞は、此頃伊藤侯爵夫人梅子の品評をなす。文字は輕けれども、評すれば、夫人の長所を擧めたるかど多し。例へば其召使を御するその上手なる、謙遜なる事、嫉妬心なき事、きれい好きなる事、志まつの好き事、女官洋服々制の嚆矢たり、また婦人慈善會創立者たるの功勞ある事、赤十字社事業に熱心なる事、などを例記したり。

●母親不用　彼の「ガラス」製の小兒飲乳器を「乳母いらず」と一名にいへるが、さて乳母はおろか母親まで無くて、自然に小兒の育つべき器械を工夫せるもの海外に在り。これも女子が社交に忙はしき故なるか。其器械の一は、電氣自働搖籃にて、米國有名の電氣學者エヂソン氏の妻の双兒を擧げたる時、氏の徒弟等より贈りたる祝物にて、小兒の臥する直ぐ頭上に、電話の受話器に類するものあり、小兒憤る時は、其聲直に受話器に傳はり、之と時計狀を爲したる器械との間に電流通じ、同時に搖籃は左右に搖動を初む。尙ほ憤りて止まざる時は、右時計狀を爲したる器械の働にて、搖籃の側面に備へたる乳呑延び、小兒の口元に達して乳汁を傳ふ。腹中寂しくして憤るに非ず、尙泣き止まざる時は、更に右時計狀器械の働きにて、別に備へたる鎭痛劑の小瓶出で、小兒に之を嗅せしむるやう成り居れるものなりといふ。また一は、伊太利人の發明したる啼兒音樂器械ともいふべきものにして、嬰兒のむつがりて啼き叫ぶは、親の身に取りて睡眠を妨げられ不愉快なるものなれば、之を除かんが爲に、一種の機械の其裝置は、彈力性ある一種の帶の中央に、一種の樂器を附したるものにして、小兒啼き叫ぶときは、此帶を兒の額に卷き附くるに、彼樂器は、其口のあたりに在りて、啼き叫ぶ小兒の息にて、此樂器の中の金物の片葉を顫動せしめ、一種の樂音を發するに至る工夫なり。樂器の音は啼聲より調子高き故、小兒は此聲を聞きながらに、いつしか睡眠を催すべしとの考案なれども、帶など絡かれては、小兒は氣味好からずして、終夜啼き通して、兩親は、奏樂を聞く程にて心地よきか知れぬが、其兒は迷惑なものなるべし。

●京都府高等女學校の風紀（校長の談話）　質素節約は婦人の美徳にして、徳性の涵養は質素を欲するに外ならず。故に容儀虛飾の弊風を矯めんが爲めには、他の滔々たる女學校に先立ち、夙に美服を纒ふを禁じ、女教師の如き木綿紋付羽織の外着るを許さゞれども、生徒に對しては、絹物にても着古し若くは張り替へ物なれば之を許可し居れり。勿論家庭の便宜に任さるゝ主意なるを以て儀式の際には固く之を禁ぜり。其他下駄履物より傷髮の類まで干涉する學校もある樣なれど、家庭に質素の美風行はれ生徒に節儉の德性涵起するにあらずんば、恐くは形式的の質素儉約に終らんを恐るゝがゆゑ、寧ろ之を強ひるの理を識にせず、之を例へば生徒に絹張の蝙蝠傘を用ゐるを禁ずるも、絹張よりも尙ほ價高く且つ華美を極めし綿子張の蝙蝠傘を用ゐるに至らば、教育の本旨に悖るゝに庶幾し。桑付の下駄を禁じてもそれよりも贅澤の白木の下駄を穿くに至り、縮緬の帶を許さゞるも尙ほ他の絕品にして世俗の所謂高尙と稱する眼立たぬ品を用ゐる者あらば、學校は其取調に日も亦給らず、而も生徒は學校より歸れば、直に美服を纒ふに至る是れ豈煩雜にして効果尠く、寧ろ大主意を忘れたる者に非ざるなき乎。學校の希望は家に在ても他出の際にも、詳しく云へば日常百般一身を通じて節約の風行はるゝにあるを以て、物品の項目を分けて禁制を立てず、衣服の外勉めて節約主義に合するを要とす。我校は實に之を以て風紀を維持し、家庭にも此氣風を推し及ぼしたりと信ず。云々とは同校々長河原一郎氏の語る所なり云々（大阪每日新聞）

●校服問題　土佐國安藝郡羽根小學校長は　生徒式日の禮服を定め、女子は校服に限ることなしたるより、物議を起りたりといふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●名古屋の女子　名古屋は良家の子女と雖も、勞働もしくは淫賣をなして、自ら嫁資を作るの習あり。されば子守下女等の風儀の頽れたるなんど、目も當てられぬ有樣と、思案外史の「名古屋怪習」はいふ。

●女子異習の一　愛媛縣越智郡關別村大字大下と云へるは、今治沖に在る一孤島なるが、古來同地の女子は、農業の時に他へ出稼ぎなし、過分の賃錢を得て歸島するを、唯一の名譽とし、若これ等に從事せざる者ある時は、親僚姻と冷評して、緣組にも、これを擯斥する奇習傳はれり。現に、同島の娘ども六十餘名は、獨刈の手傳ひとして、今治町近在に出稼ぎなし居るよし。

●女子異習の二　越後國北魚沼郡字賀地の庄と稱する地方にては、婚禮後、花嫁は禮廻りと稱して、村內の戶每に挨拶に步き、挨拶を受けたる家にては、附木二把を、黑塗の盆に載せて答禮とす。同地方は男女ともに大酒家多く、又、俗俗と遲ド淫猥にして、娘又は後家にして姙娠したる時は、必ず他家を借りて分娩すと云ふ。

●女學生の袴　を穿つこと、近頃流行するをば贊成して、兒童研究記者は、明年七月、外國人ども雜居すべき時となれば、我國の女子も我國のに劣らず、活潑にして、すみやかに、往くべき處にゆき、歩むべき時に歩まねばならぬに、今日のまゝにては、如何にも不都合なれば、彼女學生の風の、早く一般に及ばんこそ願はしけれといへり。

◎三のH　小兒教育は三のH字より成立つべし。即ち Hand, Head, Heart. なりと、北米評論のバルトン氏はいふ。

●本誌に對する世評

▲女學雜誌　第四百七十四號

女學雜誌界の大王たる本誌は其第四百七十四號を發兌せしは目出度し、種々の各欄を設け唯に女子の誦讀を必要とするのみならず、實に男子の一讀を値するの快文雅語載めて本號にあり。吾人は本誌の由來雜誌界に雄飛を恣まゝにするの偶然に非ざるを知るなり。（十二月廿日德島新報）

▲女學雜誌　第四百七十五號

社說には「國際は女學の敵」「佳人晚婚の恨」の二篇を首位に置けり。文字こそ生平の特色にたがはず、やさしく書下されたれ、前者の論鋒は一擊より鋭どく、當世輕薄才子の腐腸を抉りつくし、倒戟術躍りし聲あるの慨あり。後者の晚婚をなぐさむるの一篇に至りては、句々涙ならざるなく、言々思想の至高なる慈父母の肺腑より迸りいづるの教訓ならざるはなし、天定勝人幾時の世までか軟骨腐腸の輕薄才子が專有の要塞たるを得ん。詔を寄す女學氏叫べ々々反響の到るまでは叫べ、吾人亦鼓を撃ふて後へに隨はん。（十二月三日、若越新聞）

▲女學雜誌　四百七十五號

社說、家庭諸欄の記事毎に、概ね吾儕の理想と持論に投合するを喜ぶのみか、所報の事實も亦た精確なりと信ぜらる。然るに本號万朝報賣れる理由と題する記事中天龍上流の一製紙會社は、万朝の木製紙濫立の爲め山林を濫伐して水源を涸らせりと云ふに至ては、事實少しく誇大に過ぐるなきか。但濫伐の樋木材原料悉く盡きたるため、最に舶來洋紙を用ひ今は王子製紙を用ふと言はゞ、復た何をか言はん。（卅一年十二月八日、扶桑新聞）

▲女學雜誌　女學の雜誌中最古の發刊に係り、啻に女子に限らず、高尙なる家庭に持囃さるゝ女學雜誌は、十一月廿五日第四百七十六號を發刊したり。社說には「當年の勤王論者」「財政困難」評論には「婚姻是非」「沙翁新論」女學には「楊貴妃論」「夢婆問題の新研究」あり其他隨感、教育、雜錄、詩文、片々、時報の諸欄皆にぎやかなり。

▲如何に忠國の言をなすも記者は一個の淺薄漢なりと知らば誰れか之を信ぜんや如何に金言玉辞を列ねるも至誠なく愛なくは鳴る銅や響くねうはちの如し濁世は如何に彼等に背くとも俗人は如何に彼等を変るとも超然守る處あり始終其主義信仰を確執するもののみ眞に感化力を有す。然り記者と雜誌の其關係豈少なりとせんや。

其表紙の紅ゐなる字もて閑雅に現はさるゝ其論說の何となく脫俗の風ある其主張誰れか純潔高淨なる誰か十年女學の爲め斯道の爲め犧牲せし嚴本氏を敬慕せざる者あらんや其の敬虔の念に富むは元より神靈の賜はるべきものその「ミスチック」原素に富みて時々思想の幻境に逍する如きあるは或は故若松賤子の靈と交はる深きによる乎莫迦日本現時の趨勢は餘りに唯物的たるにあり現世的たるにあり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌の如き氣に彼等の進路を指すと謂ふ可し獨り女子に適すと云はず荷も眞理を愛し悟道の域に達せんと欲せば先づ熟讀を要するものならん乎（應治三八六號、高杉榮二郎君）

▲女學文壇雜俎　（本誌〆切まで）

◎夫人の素顏（伊藤お梅夫人）……………報知新聞十二月四、七、九、十一日
◎女德の頽敗（永井生）……………每日新聞十二月十日
◎現今女子一般の狀態を述へ併て陛下妙齡女史の反省を望む（中澤溺亡）…………………高知日報十二月三日
◎原公道の母（九龍居主人）……………讀賣新聞十二月十二日
◎家庭に於ける繪畫美術、鶴城生）……………千代田新聞十二月七日
◎少女の賤業を禁ずべし……………時事新報十二月六日
◎女裝に就きて婦人倶樂部……………兒童研究第二號
◎女子の服裝に就きて（三輪田眞佐子）……………女子の友第三十五號
◎女子に關する法律上の德育（磯部䗇州）……………同　上
◎將來の女子……………女鑑第百七十號
◎古代の女子道德（白松閣主人）……………同　上
◎育兒說（瀨川醫學士）……………世事畫報第七號

時　　報

◎學　事

●和歌山縣立高等女學校設立の議　和歌山縣にては、十二月上旬より開かれたる縣會に於て、臨時部教育費審議の際、一議員の手を通して、縣立高等女學校設立の建議をなす由。これにつきて同縣會議員の一人は、該建議案は女子教育上目下の急務なるを以て、是非共其設置を望むも本縣經濟上の都合もあれば、本期の議會が之を通過するも、必ず明年度に於て之が施設を請ふものにあらず。唯だ縣民の希望を知事に申告し、時機を見て原案の提出を望み、又議員に於ても縣經濟の都合を見　協贊する樣、致したきものなりといへりとぞ。

●函館高等女學校設置の議　北海道函館商女學教育係にては、現在に於ける函館女子高等女學校の規摸を擴張して、高等女學校を併置すると同時に、高等の教育を授けんとの希望にて、過般學務委員諸氏とも協議の末、目下併置に關する費用經算の調査中なるが、不日出來次第、更らに學務委員會を開らき、篤と熟議を遂らしたる上、來年度の通常區會に提議する計畫なりといふ。

●北海道旭川裁縫專門學校の創立　北海道旭川の有志家友田澤井石神の三氏は、本道女子教育の不振を憂へ、此程私立旭川裁縫專門學校なるものを新設、校舍建造に着手中の所、昨今落成を告げたるを以て、去月二十日頃より開校したりとの事なるが、今校規則は正科を三年とし、裁縫及び編物を實用的に專修せしめ、併せて家事經濟女禮式生花抹茶等女子必用なる技藝を授くるにありて、漸次完全なる女學校となすの見込なりと。又年長け若くは家事上の都合に依り、正科を踏む能はさる者の爲には、特に隨意科目を專修せしむるの方法を取り地方適當の教授をなす答なりと。

●私立札幌家政學校設置の計畫　北海道女子の教育及び風儀の頹廢不振なるに見る所あり、札幌區在住の佐々城豐壽夫人は私立札幌家政學校なるものを設置し、大に女子の教育を努め、併せて風儀の矯正を圖らんものと、先頃より熱心奔走する所あり、其結果として札幌農學校校長佐藤昌介氏夫人及同校教授宮部金吾氏夫人の贊助を得る事になりたれば、當分の內教舍を札幌農學校に置き、往々は永山將軍夫人阿部夫人其他區內知名の士の各夫人方に依賴して、純然たる一大女學校となすの企望なりといふ。學科目は裁縫、衛生、經濟、倫理、會話、音樂、英語の大畧を教へ、修業期は五ヶ月、入學年齡は十六歲以上、月謝は二圓なりといふ。

●愛媛縣宇和島町高等女學校設立運動　愛媛縣にては、曩に縣內三個の私立高等女學校を限り、一年千五百圓宛の補助金を下附することなりて、それにつきては、松山市の愛媛高等女學校及び今治町に新に設立せんとする同種女學校の二へ同補助金を下附するとは、目下開會中の同縣會の教育費議案中に組込まれある由なるが、宇和島町の有志者も、また等しく一高等女學校設立の計畫をなして、以上二個學校と同時に、補助金下附を、決議せられんとを計り、同地方有志者總代二三名、松山に到りて、縣會議員中を運動せりといふ。

●臺灣土人の女教師　臺灣八支蘭國語學校第三附屬たる士林女學校にて、今度生徒中より三人を拔擢して女教員助手になしたるが、一人は王阿蜍、次は曾受卿、一は郭明婿にて、各俸給四圓五十錢を給與せらる。十番婦人にして教師となれるは之が嚆矢なり。

●神奈川縣立高等女學校新設經費額　橫濱市教育會あり、縣知事宛建白したる高等女學校新設案は、採用となり、既に縣會へ議案を下附したる由なるが、其新設

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

經費額は、總計二万四千五百二十八圓九十錢一厘にして、内一万圓は寄附金を以て充て、殘餘を市部地方税負擔となし、其内二万八百八圓を新營費、三千三百七十九圓十八錢一厘を、一ヶ年の校費に、其他を俸給及び他の經費に充つる見込なりといふ。

◎會　合

●伊豫松山の婦人會(松操會)　伊豫國松山市にては、今回有志男女相計りて、婦人の道德を勸め、併せて其品位を高くせんとを目的として、松操會なるものを起し、去る四日、松山公會堂に於て其發會式を擧げたりといふ。會長は、溫泉郡長土居正業、幹事は、師範學校教諭等五名の婦人にして、協議員には、高等女學校長、中學校教諭、醫師、實業家等なりとかや。通常會員は十三歳以上の同縣婦人に限り、會費一ヶ月三錢乃至五錢、常集會は毎月第一土曜日にて講話、手藝、音樂等をなすものゝ由、而して當分假會場を愛媛高等女學校内に置くといふ。

●岩沼婦人衞生談話會　宮城縣名取郡岩沼町にては、今回、表題の大き會合を組織して、過日同町小學校に於て其發會式を擧げたりといふ。

◎人　事

●岐阜縣の孝子貞婦四人受賞　十二月一日付を以て岐阜縣知事は左の四人の孝子貞婦を襃賞したりといふ。

▲其一孝女　　岐阜縣安八郡大垣町岸田三喜次郎三女　イ　ヘ

資性柔順父母に事へて孝父三喜次郎明治廿四年中明を失し爾來家業を執る能はず家素より貧困なるを以て修學の傍ら父の手を扶し行商を爲さしめ以て家政を助け一意專心其志行を變ぜざる事茲に六年一日の如し洵に奇特とす依て其爲賞金三圓下賜候事

▲其二貞婦　　岐阜縣士族島田樹太郎母　セ　ン

資性柔順姑に事へて貞孝明治元年夫を喪ひ爾來克く婦道を守り三子を養育す家素より貧困なれば勞役以て口腹を營み姑の嗜好物は必ず之を求め其意に違ふ事なく專心一意孝養を盡すこと四十有七年終始一日の如し洵に奇特とす仍て爲其賞金三圓下賜候事

▲其三孝子　　岐阜縣士族　米　山　祖　年

資性溫良幼にして父を喪ひ母に事へて孝養時々其意を迎へんことを勸むるも孝養の缺くを懼れ之れを非辭し專心一意志行を變ぜざること茲に四十有年終始一日の如し洵に奇特とす仍て爲其賞金三圓下賜候事

▲其四　　岐阜縣安八郡大垣町　井　上　藤　次

資性溫良父母に事へて孝弟妹に對して友爲めに一家克く輯和す父を喪へる後倍々母に孝養を盡し志操を變ぜざること茲に五十四有餘年一日の如し洵に奇特とす仍て爲其賞金三圓下賜候事

◎雜　事

●和蘭女王　和蘭國女王ウイルヘルミナ、ヘレナ、ポーリナ　マリア陛下は、千八百九十年を以て、亡父帝の大統を受けさせたまひ、母后エンマ陛下の攝政下に、民衆之を仰ぐと日の如く、其德に歸す。爰に御年十八才、去る九月一日を以て即位の大典を擧げさせられたるが、國民は女皇に於て、第二のヴイクトリア和蘭より出づへしと思へるぞ。而して又皇配は、親戚たる英獨皇族の内より撰び玉ふよし。

●伯林大學と女學生　最近の報告によれば、伯林大學の女學生總數は一六二人にして之を類別すれば、獨逸婦人九八人、米國婦人二六人、露國婦人二三人、佛蘭西婦人二人、英國、墺國、諾威、瑞典各一人にして、此等の女學生は如何なる專門を修むるやといふに、主として哲學、語學、史學を修め自然科學、法律、經濟、醫學を修むるものも、多きは十人少きは二三人づゝなきにしもあらざるも、まづ前記の三科に趣味を有するものゝ如し、之れを一八九六一七年に比すれば六七人を增加したり、他の大學は伯林大學に及ばざるも、亦少からざる女學生を有す、伯林大學總長シュモッレル氏の如きは大に學生を歡待する方なり、然れども稱號は女學生の卒業者には與ふることを許さずといふ。

くれにけり
ありて
うきみの
ながらへば
またこん
としもかく
やなげ
かむ
　　紫　冲

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雑誌自第四百五十七號至第四百七十八號總目録

明治三十一年度

◎口繪

伊太利國ピノア府墓場の景　第四百五十七號
哀別離苦の圖(普佛戰爭記念碑畫彫)　第四百六十一號
宗教的東方問題寓意畫　第四百六十二號
故萬國婦人矯風會頭ミス、フランセス、エリサベス、ウィラード肖像　第四百六十三號
聖なる家族(クナツプ畫)　第四百六十九號

◎社說

去年今日　一
年頭境界を見る　一
逆境を轉活せよ　二
第二維新の氣慨　三七
庭前の花園　七五
支那人果して保守的　一一一
小學卒業後の女子　一四九
今時の男子　一五一
宗教的東方問題　一八五
不景氣は人心の實相のみ　二二一
逆境の感謝　二二三
誠實即卓識　二五七
逆風孤吽　二五八
無學の過　二九五
永久の身代長年の壽命(上)　二九六
其下　(四六七號)三七三
興論改造の一振作　三三三
第一期總選擧の時の社說　三三五
新刊のことは　(四六七號)三七一
政黨內閣　三七二
第一等の事　三七四
宗家主義は非なり　(四六七號)三七一
鐵路局の乳を止む　(四六七號)三三八
政客の所謂第二維新　三六九
蓄妾打擊　四〇七
時勢論　四四三
社會の隋落を如何せん(鏡村)　四四九
親としての人、子としての人、神人相思相愛　四八一
非改革の辯　五一七
重厚の人斷の如し　五二一
家庭訓に於ける忘の一字　五五五
當今女學の短所(女學生の活智を育せず)　五五八
御信任論　五九一
君側の御爲と勤王家　五九二
獵官熱藥　五九七
閨閥は女學の敵　六二九
佳人晩婚の恨　六三一
當年の勤王論者　六六五
財政困難　六六七
女學の懷疑時代　七〇三
女性の感激犠牲　七〇五
公娼の封設、公娼の寬假　七〇七
南洲先生銅像除幕式　七三九
誰か詔勅の責を負ふぞ地租增徵の議　七四〇
クリスマスの歌　七四四

◎家庭

一家の春　四
主婦年頭の覺悟(ちやうてい)　五
家政日記(かもめ)　七
子供の育て方に就ての注意(吉住門子)　八
當節の臺所　一〇
海舟先生談話(家政經濟に關して)　七七
子供の日記(かもめ)　八〇
某小學校生徒の正月日記　八一
小倉織の事◎幼兒との問答　八六
堅固なる家政　一五二
器物の取扱方並に掃除　一五六
衛生上[illegible]　二二四
子孫に傳ふべき最上の寶(非[illegible])　二二六
歐化主義者も流行らんとする歟　二三〇
無用の用　三〇〇
女房役(おうてむ)　三〇一
家庭教育の根據　(四六七號)三四二
經濟の上手下手　(同)三四四
家風を如何にせんかと[illegible]へ　(同)三四七
嗚呼しんきくさし　(同)三四九
夫婦取換て見よ　(同)三五一
暑中自から涼風あり　四〇九
妻を擇ぶ東西相違ふ事　四一一
交際の家風とは何ぞや　四一二
獵官熱婚何ぞ[illegible]　四一三
面白からぬ夫　四一四
官[illegible]すべし(西[illegible])　四九〇
男子訓(非[illegible]人)　四九二
私生兒　四九六
教育死活の話　四九七
嫉妬の事　四九九
當用日錄　五六一
[illegible]　五六七
時[illegible]の女儀　五六九
多くの事に心勞せず　六三四
[illegible](焦[illegible])　六三六
小兒の智慧(長汀)　六三九
兒童研究の近情(經理[illegible]談)　六四一
假出生の家庭　七〇八
三代目(鴎村)　七一一
亭主の威光(ちやうてい)　七一四
支那人の家政　七一五
夫婦反𣪘の機[illegible]　七一七

◎女學

女學生の淫行　四〇
地方某私立女學校の危險(西[illegible])　四一

米國留學の一女生が田舍日記(一)　四六
其二　一一七
信號敬啓の感想　一一四
日本基督教主義女學校現在表　一二一
佛教主義の婦人會　一二四
女學校内の男性　一九〇
ウィラード女史を弔す　一九三
工女統計(觀潮樓主人)　一九四
可憐楚々の愛嬌　二六七
某女學校の卒業生に告ぐ(成瀬仁藏)　二六八
女囚の現況　二七一
ウイラード女史の生涯(アンナ、ゴルドン述)　二七三
學窓の問題　二七六
高等女學校卒業の經結果　三四六
男女相見る機會の差(非單)　三四七
琉球の女俗　三五〇
能立身者の家政　三七四
蓄妾の弊風　三七八
時事新報の婦人論　三八四
名士の子息に對する質問(曲浦)　四五二
女飾の一瑕(かもめ)　四五三
全國現在各種女學校一覽　四九四
美衣論　五二九
高等女學校の教育を論ず(木村)　五三一
都會の女子と田舍の女子と(かもめ)　五五五
女風俗沿革史　五五六
女性の兩面　六〇四
女學生の雜話　六〇六
婦人の犯罪　六〇八
楊貴妃論(長谷述)　六七八
蓄妾問題の新研究(山口東根)　四七六號　六四五
家庭倫理(一)(住吉寄生子)　七〇四
女學校に對する希望(山形東根)　七四九

◎評論

日本基督教界の將來　五七
任意論の可否を論ず　一二五
モデルは政治に非ず　一二七
晩先生　一九六
新島襄及福澤諭吉　二六二
基督教界今後の傳道法　三四三
青論史冊(金風)　三八九
學者政治　四六〇
支那改革　五二三
士族と町人　五二六
北米民主共和政の末路([illegible])(青柳猛)　六一二
娼妓是非(木村)　六七四
セキスピヤ新論(青柳有美)　六七七
竹[illegible]小學音樂論(青柳有美)　七五二

◎講義

正月のはやしもの(きよくほ)　一一
日本その昔の頃(小[illegible])　八七
仙木流行の香(非單)　一六四
櫻花小史(曲浦)　二三二
歐米學生の高尚事業と出世人の事業　三〇六
老子女訓(上)　四六七號　三三八
其中　四一五

◎史談

源平二氏(一)(おうそむ)　一四
其二　九一
男女交際の[illegible](曲浦)　一五九
何處の女學生ウイラード女史を弔はす)(湖村)　二四七
東方日々(一)(非單)　三一六
其二　五〇三
谷川氏の戦士(井上女史)　五七一
亂世を重んず今昔の婦女(竹[illegible]子)　五七二
ワシントンの父とゲーテの父と(有美)　六四六
日本餘韻(有美)　七一八

◎教育

臺灣島民子弟の智識　四九
教育統計、名士教育談、學校醫の設置、新文部大臣、西園寺文相の談　五五
當今の學風空疎淺薄に非ずや　一二九
小學校の基本財産、登對教育の統計、小學教員に就いて、宿學者、倫理教育の價値、海外教育界　一三一
迫害せよ然らざれば勝負せよ　二〇一
雜居後の準備　二〇二
同志社問題、宗教學校問題の放言問答　二〇四
教士闘嘴　二七八
人の子を殺ふ者(曲浦)　三五一
教育界時言(慈善事業の取締り、日本人の非日本人思想、我國の價値、教育界の腐敗、廉恥なき紳士、新聞紙の無責任、東京盲啞學校創立以後の成蹟)　三五三
海外教育界　三五六
文部大臣論　三八七
學者先生　三八八
野狩野獸の用(非單)　四六四
教育の緩急(長汀)　四六七
文相待遇の若手　四六九
體育論　五四一
曲學阿世論(曲浦)　五四二
教育なき文明進(曲浦釣士)　六一五
文部大臣論　(四七六號)六五一
教化の緊急は乖て循環なり　(同)六五三

◎文藝

質問の和歌(金槐和歌集を讀む)　一七
水禽何處にか去る(英詩評釋)　九三
杜律釋義(松城)　一六七
筆筒の文字　二四三

不器用の上手(きよくほ)　三一一
上田宗固の倫(長井金風)　三一二
新井十内の武勇　四一九
河東節替唄　四九九
歌七首(花圃女史門下)　五〇二
狂詩　五七三
文字と情　五七四
女性の俳諧(曲油釣夫)　六四二
那須與一扇の的(平家物語)　七二三

◎兒籃

ふしやうもの　一〇六
小天使(かもめ)　二四五

◎問答

友の有無並に大家の見習　一七〇

◎隨感

南遊行(渡臺同船の內地人◎風光明媚の高砂島◎支那人の迎鬼◎牛車の悲しき音◎榕樹傘の下◎臺灣女學の曙光◎淺ましきは人の相擊つなり◎土人の教育◎前途の推望)　二一
臺灣土人紳士の品行◎馬關の明暗◎故鄉のそら　六一
紀念日◎一雨萬水◎無言俊傑時務を識る　九六
孔夫子◎豐太閤◎湖南の弔文◎中江兆民氏の檄　一三五
小さき人の羈旅に微笑して獨り樂む　二〇六
京都祭に斷えず後ろへの人◎名士何によりてか老ゆる◎丈夫如何か愛す◎傳道の言論已むを得す◎草木豈に非情ならんや◎識らざれば也　二三九
愚夫愚婦の心◎信仰告白といふを奇む◎我上の分官◎裁判する莫れ　二八二
春の夜◎月光の賞◎我が風光◎可憐の子◎只だ自ら悲てざる耳◎神裡◎屠し牝鶏　三一四
臺灣女生來り學ぶ◎淫猥なる地方には養嗣多し◎近江の国◎天智帝◎京都の風光◎京都の都◎何と云へる情致ぞ◎千代の交情◎心身一致の妙味◎春は枝上に在り◎山師◎仙骨　三三六
活を入るる事◎力の出る事◎貴品自卑◎勇猛心◎托鉢◎憐れむべし人間◎天王寺の穴畑◎嫉妬◎人事意料外◎學風必しも愛るに足らず　(四六七號)三五一
旅懸の朝顏◎無心のよそほひ◎恬淡清思のすがた◎心に秘めて人を念ふ◎嫉妬の局◎下駄の歯入◎一切の萬物其親あり◎至誠は倫理に非ず　四八六
賞景歎美のよろこび◎旅懸のまどはり◎芭蕉と西行◎大悲の感慨◎美育◎吾子を傳道者とすゝの祈禱◎先生と坊主◎花のとづく　五四三
疑信不二◎信の千萬人相似たり◎宵に初戀のみかは◎流に溯つて源泉に味はふ　五八四
靈光り羅覺る◎宗教界の曉色◎離福家に上る◎毅然立志◎感激　六〇一
至誠は善行に非ず◎至誠且つ學ぶ◎戀愛のまことと教書の飜譯◎簡短なる信條◎猶や私なし◎木の葉の涙雨　(四七六號)六四九
達人は通人なり仙人は俗人なり◎水鳥水に跡なし◎美地常に微笑す　七二七
年の錄　七六二

◎雜錄

遊惑隨筆　二五
鬼夫婦(山月子)　二八
海舟先生詠草　三一
禪味當を論す(鷗村)　六三
レテー、コタイヴア、　六八
譚海五則　六九
怪賊靜馬の話(上)(八木文嗣述)　九八
其下　一七五
故小此木秀野稿 小說(上)　一〇一
其下　一七七
哀別離苦の図に題す　一〇六
遊吟錄
(祭故巖本嘉志子君文(櫻井鷗村)、寄興儕碧(湯谷紫苑))　一三八
婦女の淺學(曲浦)　一四〇
芳野山、天地の戀(花影)◎各地方の手鞠歌　一四二
江戸の華(一)　一七一
其二　二一二
仁君の名言◎歌くづ(ちやうてい)　一八〇
情死の哀を想ふ(上)(花影子)　二〇八
其下　二八四
美人(新躰詩)(みわ生)　二一六
時勢と女學史(三輪田眞佐子)　二五一
海舟翁の史談　二五三
故鄉の夢(新躰詩)(泡鳴子)　二八九
服裝と彩色(內原順)　二九〇
有感の記
(かなしき妻◎哀れなる子◎姑の心◎人の子)　三二一
少女子よ、閨より出でし身のなくば(新躰詩)(花影子)　三二五
日記拔萃(泡鳴子)　三二七
英國の老偉人　三五七
東京養育院を觀る(長汀)　三六二
母と共に、やまち(新躰詩)(花影子)　三六六
横井小楠(上)　(四六七號)三五六
其中　四二三
かの山(新躰詩)(三輪花影)　(四六七號)三五七
孤兒の父ジョウジ、ミウレル氏　(同)三五九
日下部氏の實況(觀湖庵主人)　(同)三六〇
紅白點々、樂美界の落穗(青柳有美)　三九二
海舟老伯談話　三九七
さいふ錄(泡鳴子)　四三〇
視察記事(櫻井鷗村)　四三二
斷腸の記(亡弟を悼ふ)(おうそむ)　四七〇
作家及社會に勸告す(銀月)　四七五

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

朝の讃美（新體詩）（花影子） 五〇八
彼山此水（白水郎） 五一〇
妹に與ふるの書（瑞溪子） 五一二
富士雜詠 五一三
私立學校論（獨嘯樓） 四七
好かぬ男◎好かぬ女 五四八
蟲聲草露（井蛙道人） 五四八
（山川と民心◎樹の逸話◎神の家◎心の花）
巣林子の網川波 鼓を讀む（八濱掬泉） 五七六
時流草語（研究學貫處主人） 五八三
美神の霹影 有美 六一七
亡弟の寫眞に題す（おうそむ） 六二一
群馬縣の公娼廢止 六四八
亡夫筆のあと（信夫さと子） 六五一
美のいろいろ（有美狂生） 六九五
富士の巻（花影子） 六五七
箕面の飛瀑を詠む（八濱掬泉） （一七六號）六五四
楓葉片々（井蛙道人） （同）六五九
（英雄世に出づるは不祥◎時代を造る）
穴の土◎真しき從軍記者
杓子定規（さゝくは） （□）六六一
樂界の秋色（竹柳有美） 七二九
海舟翁南洲詩 七五七
月前述懐（栄苑山人） 七六〇
吾家の夜涼（有美） 七六一
木戸松菊の逸事 七六三

◎時文

小說界の落莫◎小說家の□□◎□□界の□□ 五五二
文界雜評（なにがし） 六一三
（坪內逍遙氏の藏谷小波氏◎鏡山人と幼見◎俳諧雜誌ほとゝぎす◎長論の補柳◎島崎藤村氏の新作）
文界雜評（なにがし） 六五八
（基督教的文學思想◎基督教界の新聞雜誌◎日本の基督教徒の文學◎萬朝報の毀れる理由◎東京と大阪との文學の性質差異◎藤村の新體詩）
文界漫評（なにがし）
（國字改良論◎日本製の漢字支那に入る◎新聞紙は面白くなし◎思案を擬題す） （四七六號）六六二
文界漫言（なにがし） 七三三
（飜譯小說◎飜譯◎小說の對話）
文界漫言（ちやうて□） 七□
（字音假名遣改正の結◎藤村 新作「夏草」）
◎新刊評 七十餘種
◎新雜誌

◎時評◎片々

あざ抜新法

◉故茅根清吉氏は舊水戸藩士、維新前後國家に盡し、事蹟尠からざりき明治四年初めて痣の新療法を思ひ立ち十二年頃全く家事を擲ち足跡殆ど府内に普く一心不亂に藥物の採集と治療の方法とを研究して家政全く傾き一身落魄し果てけるが計らずも高島將軍の聞く所となり爲に三年間衣食を支給して研究の便宜を與へしめられき

◉氏が立志の原因を語らんに氏の親友某面部に大なる黑痣ありき人々に爪彈きせられ妻を迎ふべき年頃となりても誰一人嫁がんといふものなく良醫といふ良醫に就きて治療を乞ひたれど孰れも不治の症なりと謝絶せられ涙の中に月日を送りけるを氏は心太く其の不幸を憐むの餘り男子の醜は猶忍ぶべし世には女子にして此患に罹り外出すら憚りて一生を不愉快に終るも多く不治の病と一括して醫家の取合はざるこそ心得ねいで此不幸の人々の爲に治法を發見せんものをと深く其志を決しけり

◉あらゆる苦楽を經たる後試驗に用ふる資料には婦人の經水こそ適すらめと自ら思ひ定めて妓樓に遊び懇な娼婦に結び經水を獲て歸りしは明治十一年頃の事なりき

◉氏乃ち採集したる藥物の中より二十餘種の藥品を選びて之を精製し純白なる粉劑となし十二年創めて之を患者に施し奇効を奏しけり

◉氏が十年の久しき艱難辛苦を經て漸く發見したる藥品は純白なる粉劑なるが其用法は先づ水にて溶解し患部に塗布するに在り塗布一兩回にして患部の上皮自然に剝脫す引續き塗布四五回すれば患部の全體に痂を生じ日を經るに從ひ痣は漸次其痂と共に剝脫するなり輕きは一週間、重きも二週若しくは三週間にして痕跡を留めざるに至るといへり

◉氏は折角以上の發明を完うしたるものから研究の中途苦心焦慮のため大に健康を害し肺患となり東京神保病院に入院せしが終に本年八月十二日六十二歲を以て不歸の客と爲りき

◉痣の新治療家故茅根清吉氏が遺法を直傳せりといへる大石保氏今當地西長堀鰹座橋畔の野村方に出張所を設けて此新治療に從事し昔來醫家の匙を投げ居れる世上幾多の痣に困める士女が精神上の痛苦を拯はんとせり

◉茅根氏は生前氏に其製藥の術と治療の方法とを擧げて教授し置き大石氏は其後米國に渡航し桑港に在りて獨逸のドクトル、イエリチック氏の腕の文身を拔取り次でムーレー孃の痣をも拔取りたりと語れり(十二月八日、大坂朝日新聞)

右　大石保

東京本所區南二葉町三番地

明治女學校受捐金報告

金拾圓也　栢壁町　練木市右衛門殿

金五十圓也　門司　松尾敏章殿

金五圓也　若松　無名女史

金三圓也　中泉　無名女史

金廿圓也　東京　酒匂常明殿

金十圓也　札幌　小川二郎殿

金廿圓也　東京　渡瀨寅二郎殿

金廿圓也　札幌　植村澄三郎殿

金十五圓也　札幌　一柳友次郎殿

金三圓也　札幌　青山正道殿

金五圓也(通常經費ノ内)　鹿沼　鈴木要三殿

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿九年二月十九日遞信省